

高等学校における防災教育推進事業 令和7年度実践記録集



令和8年3月

青森県教育庁スポーツ健康課

はじめに

近年、全国的に集中豪雨による洪水災害や雪害等の発生に加え、巨大地震が発生するなど、今後も私たちがこれまでに経験したことがない自然災害の発生が危惧されます。本県においても、令和7年12月に発生した、青森県東方沖を震源とする最大震度6強を観測した地震により、発生直後、青森県太平洋沿岸に津波警報が発表され、幸い大規模な津波被害は免れたものの、沿岸地域に住む方々の避難が必要となるなど、日頃からの備えの重要性が再認識されました。こうした自然災害の発生は、私たちの生活や社会全体に大きな影響を与えることから、学校での防災教育において、防災・減災に関する知識や技能、そして地域との連携や協力の精神を身に付けることが必要です。特に、高等学校段階では、災害発生時に主体的に地域の支援活動に参加するなど、地域社会の一員として安全な社会づくりに貢献できる「共助・公助」の育成を目的とした防災教育を実施し、その普及を図ることが必要であると考えております。

この実践記録集は、県教育委員会が令和7年度に実施した「高等学校における防災教育推進事業」の実践校10校（6団体）による取組などを紹介するものです。総合的な探究の時間や特別活動などで行われた防災教育の具体的な内容のほか、地域や関係機関との連携に関する成果や課題について、写真等を交えて分かりやすくまとめました。各実践校では、地域の災害リスクに応じて防災教育のカリキュラムを工夫し、生徒の防災・減災に関する知識や意識、行動力を育てております。

県内全ての学校において、本実践記録集を活用し、地域の災害リスクに応じた防災教育に取り組んでいただくとともに、大規模災害を想定した実践的な避難訓練や地域と連携した避難所運営訓練の手法等を参考とし、既存の避難訓練の見直しを図っていただきたいと思います。

結びに、本実践記録集の作成に当たり、御協力いただいた実践校の先生方や生徒の皆さん、そして全ての関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

青森県教育庁スポーツ健康課
課長 高井 和紀

目 次

第 1 部 県教育委員会における取組

- | | | |
|---|---------------------------------|---------|
| 1 | 令和 7 年度高等学校における防災教育推進事業
実施要項 | 1 ~ 2 |
| 2 | 教職員視察研修 | 3 ~ 12 |
| 3 | あおもり高校生防災サミット | 13 ~ 18 |

第 2 部 実践校における取組

- | | | |
|---|----------------|---------|
| 1 | 青森県立青森北高等学校 | 19 ~ 28 |
| 2 | 青森県立弘前南高等学校 | 29 ~ 36 |
| 3 | 下北BOUSAIネットワーク | 37 ~ 46 |

※参加校

青森県立田名部高等学校 青森県立大湊高等学校

青森県立大間高等学校 青森県立むつ工業高等学校

青森県立むつ養護学校

- | | | |
|---|---------------|---------|
| 4 | 青森県立名久井農業高等学校 | 47 ~ 56 |
| 5 | 青森県立青森工業高等学校 | 57 ~ 64 |
| 6 | 青森県立三沢商業高等学校 | 65 ~ 74 |

第1部

県教育委員会における取組

令和7年度 高等学校における防災教育推進事業 実施要項

1 趣旨

実践校において、自然災害発生時に地域の防災活動に参加するなど、地域社会の一員として安全な社会づくりに貢献できる「共助・公助」の育成を目的とした防災教育を実施し、その取組を県内の高等学校に普及させ、高等学校における防災教育の充実を図るものである。

2 概要

本事業は、令和6～7年度の2か年で実施することとし、実践校は年度ごとに県立高等学校から公募により6校程度選考する。

実践校においては、次の(1)、(2)を考慮した防災教育に取り組む。

(1) 地域の災害リスクに応じた実践的な防災教育を行うこと。

(2) 発達段階に応じた防災教育として、「共助・公助」の資質・能力の育成をねらいとした防災教育を行うこと。

なお、防災教育の実践に当たっては、既存の教育活動をベースにして行ったり、外部講師を活用したりするなど、教職員の負担増大にならないよう工夫する。

3 実践校 6団体10校

- ・青森北高等学校
- ・弘前南高等学校
- ・名久井農業高等学校
- ・青森工業高等学校
- ・三沢商業高等学校
- ・下北BOUSAIネットワーク（共同実践グループ5校）
 - 田名部高等学校
 - 大湊高等学校
 - 大間高等学校
 - むつ工業高等学校
 - むつ養護学校

4 実践校における取組

取組1 防災教育を担う教職員の資質向上に向けた取組

○実践校教職員による視察研修（計画作成：スポーツ健康課）

教職員の防災教育に係る資質向上を図るための視察研修を実施

- 〔主な視察先〕
- ① 東北大学災害科学国際研究所
 - ② 宮城県多賀城高等学校災害科学科
 - ③ 宮城県石巻市 旧大川小学校震災遺構

取組2 実践校における防災教育の実践

(1) 防災教育に係る外部講師・防災関連施設等の活用

各実践校における防災教育の専門性を高めるために外部講師や防災関連施設等を活用する。

(2) 「令和7年度あおもり高校生防災サミット」への参加（計画作成：スポーツ健康課）

各実践校で取り組んだ防災教育の内容について、実践校の生徒同士による発表や意見交換を行う。

(3) 高校生による出前講座等の実施

取組3 実践事例の普及

○記録集の作成・配布（計画作成：スポーツ健康課）

高等学校における防災教育推進事業費（新規）（R6～R7）

事業の目指す姿（アウトカム）

現状 → 事業終了後の姿

- ① 気象災害の頻発化・激甚化や大規模地震の発生が危惧
◇ 地域の災害リスクに応じた実践的な防災教育の重要性が増大
- ② 発達段階に応じた系統的な防災教育の推進の必要性
◇ 高等学校段階では、地域の防災活動に積極的に参加し、「安全で安心な社会づくりに貢献できる」生徒の育成が目標

※県内公立学校における防災教育実施率

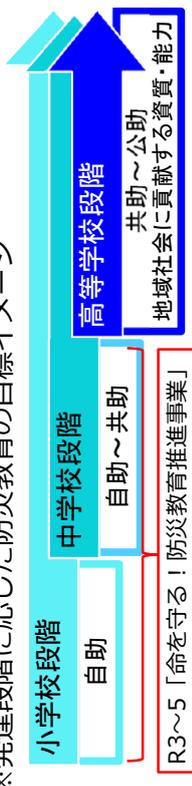
小学校 (257校)	中学校 (147校)	高等学校 (52校)
94.2%	93.2%	80.8% (42校)

自治体防災部局等と協働した避難訓練の実施校 計5校/42校中

学校安全の推進に関する計画に係る取組状況調査（R4文部科学省）

→ 高等学校での地域と協働した防災教育の推進を目指す

※発達段階に応じた防災教育の目標イメージ



→ 地域の防災活動に参加し、安全な社会づくりに貢献できる人材の育成を目指す（将来的な地域防災の担い手へ）

課題

- 高等学校では、安全な社会づくりに貢献できる人材を育成するための防災教育を着実に実施する必要がある。

目指す姿を実現するための取組（アウトプット）

【概要】

「共助・公助」の資質・能力の育成をねらいとした防災教育を高等学校に普及させるため、県立高等学校6校を実践校として、以下の取組を行う（R6～7、年度更新）

取組 1 防災教育を担う教職員の資質向上に向けた取組

○ 実践校教職員による視察研修

- ・ 実践校での防災教育を推進する教職員の資質向上を図るための視察研修
- ・ 1校当たり教職員5名、宮城県内2泊3日を想定（視察先）東北大学災害科学国際研究所、多賀城高校災害科学科、旧大川小学校震災遺構

取組 2 実践校における防災教育の実践

○ 防災教育に係る外部講師・防災関連施設等の活用

- ・ 実践校で行う防災教育の内容に応じた外部講師の派遣（1校当たり年3回）（講師）大学教授、日本赤十字社職員、青森県防災士会
- ・ 生徒による防災関連施設等の視察（1校当たり年2回）（講師）地域県民局職員、建設関連企業

○ 「あおもり高校生防災サミット」の開催

- ・ 防災教育を通じて学習した内容や地域防災に関する課題等について、実践校の生徒同士による意見交換を行うための交流会（年1回）

○ 高校生による出前講座等の実施

- ・ 地域社会に貢献する資質を育成するため、実践校の生徒が防災教育の成果について発表する出前講座等
（例）地域の小中学校での出前講座、公民館・地元企業での発表

取組 3 実践事例の普及

○ 記録集の作成・配布

- ・ 実践校の取組を他の高等学校へ普及させるための記録集を作成し、全ての高等学校に配布（R6～7）

教職員視察研修

1 研修の目的

令和7年度実践校の教職員の防災教育に関する資質向上を図るため、宮城県の先進的な防災教育を行っている高等学校や大学のほか、震災により大きな被害を受けた地域や震災遺構の視察研修を行った。

本研修は、「被災地の教訓」、「災害との向き合い方」、「地域に根ざした防災人材の育成」、「高校生の主体的な防災教育」の4つのテーマを軸に、各視察先を検討している。先進地や被災地での経験は、机上の空論だけでは得られない貴重な知見をもたらすことから、研修を機に、参加した教職員による自校での実践的な防災教育の考案につながることを期待する。

2 研修内容と成果

(1) 被災地の教訓

① 石巻市震災遺構大川小学校

語り部ガイド 大川伝承の会 鈴木 典行 氏

大川小学校は、東日本大震災による津波で多数の児童・教職員が犠牲となった。当時、大川小学校に通っていた娘を亡くした語り部の鈴木氏より、どうして大川小学校で多くの尊い命が亡くなってしまったのか、実際の現場を歩きながら、厳しく悲痛な問いが投げかけられた。

大川小学校では、津波を想定した訓練が実施されていなかったなど、平時からの備えができておらず、地震が発生してから高台に避難しなかったことで悲惨な結果を招いてしまったとされている。大きく損壊した校舎、周囲の何もない更地を見渡しながら、当時大川小学校で何が起こったのかを解説していただいた。

語り部・鈴木氏の話のを伺いながら、日頃の危機意識と判断・行動力を高めておくことの重要性を改めて感じた。実際の災害が発生した際に自他の命を守る行動を取れるかどうかは、普段から危機意識を持っているか、災害発生時の状況を想定した訓練を行っているかなど、平常時から防災・減災について正しい知識を持ち、日々の取組を積み重ねていくことがとても重要であることを再認識した。



参加者のコメント

- ・ 被災された保護者の方から直接お話を伺うことで、自分自身が生徒の命を預かる立場だということにこれまで以上に責任と恐怖を感じ、知識や経験がないから行動できないということがあってはならないことだと思い知らされた。実際は自分だけではできないことが多々あるため、日常的に他教職員や保護者と協力して活動する雰囲気づくりも大切だと感じた。
- ・ 大川伝承の会の鈴木典行さんから貴重なお話を伺うことができた。鈴木さんの話のインパクトが強すぎて、まだ消化しきれていないが、災害はいつでもどこでも起こりうるものとして捉える必要があると強く思った。また、教員として冷静な判断力を養い、教職員間でより良いコミュニケーションを築くことが大事だと痛感した。
- ・ 校舎の直ぐ近くに、校外授業等で使っていた山があったのになぜそこに逃げなかったのかと考えたときに、有事の際の避難場所を決めておくなど、事前の準備及び避難訓練が非常に重要であると感じた。
- ・ 考えさせられる場所だった。自分がその場に教師としていた場合、正常な判断ができていたのだろうか。こどもの意見を素直に聞き入れることができるだろうか。しかし、正しい判断ができるかどうかは関係なく、正しい判断をしなければならぬ立場に自分がいることは改めて実感した。そのために生徒の命を守る準備をしたい。また、親の立場として説明を聞いたことも大きかった。教員の責任は大きく重いものだった。
- ・ ガイドの方のお話は心に重く響いた。当時の現場の行動に疑問を覚える一方で、緊急時に適切な判断をすることの難しさを実感し、だからこそ準備が重要であると強く感じた。お話の中で、その日現場にいた人を責めるつもりはなく、何年間も準備が不十分であった制度、それを管理していた体制に対する怒りがある、という言葉が印象に残っている。これまでの学校現場を振り返り、訓練や防災教育が形骸化していることに危機感を覚えた。



② 石巻市震災遺構門脇小学校

解説ガイド 館長 リチャード・ハルバーシュタット 氏

震災遺構門脇小学校の館長によるガイドのもと、震災遺構門脇小学校を訪問した。

門脇小学校は、津波火災による被災状況を残す全国で唯一の震災遺構であり、当時の体育館や教室、学芸員が体験者の記憶を言葉（詩）と絵で表現したものや仮設住宅等を見学した。

門脇小学校は、津波火災による被害を受けたが、児童や教職員は裏山に逃げて無事であった。近隣住民が学校へ避難してきて、燃えている校舎に取り残されたが、教室内にあった教壇を橋のようにして校舎から脱出し無事であったという話を聞かせていただいた。津波火災の威力がどれほどすごいものだったかを目の当たりにし、上階へ逃げる「垂直避難」にも危険があるということを知ることができた。



参加者のコメント

- 避難行動の時系列を見ると、意思決定に迷いがなかったことがわかり、日常の訓練がいかに大切であるかを実感した。想定されていた避難経路が断たれる中で、避難してきた地域住民との避難もあったと聞き、二次災害について理解を深め、想定した対策を考える必要があることが分かった。施設の至るところに、様々な立場の人たちの体験談が言葉として記されていたが、強い恐怖、不安の中に、生きる強さを感じたことが印象に残っている。
- 何かあったときに最善の判断をできたのは、日頃の訓練や災害を想定したマニュアルの作成をしていたからなのだと感じた。「多くの人助かったからよかった」というような視点だけで捉えるのではなく、「なぜ助かったのか」という視点で生徒達に伝えたい施設だった。
- 校舎すぐ裏にある日和山に教壇を架け橋にして避難して助かったことは、大川小学校と対照的であると感じた。また、震災当日のFM ラジオ音声に臨場感を感じるとともに、努めて冷静に伝えていたアナウンサーに感心した。さらに実際の仮設住宅を生で見ることができて、ニュース映像では知り得ない狭さ、不便さを少しでも感じることができた。
- 「素早い避難」と「学校での安全確保」の重要性を理解し、災害をいかに自分事として受け止め、行動することが大事であるかを実感した。

③ 宮城県多賀城市の防災・減災の取組

講話 多賀城市総務部危機管理課防災減災係

多賀城市は、東日本大震災において唯一「都市型津波」に襲われた地域とされ、多くの犠牲者が出たほか、市の約半数の住戸が損壊し、甚大な被害を受けた。震災後は、幹線道路をつなぐ災害時避難道路、災害用備蓄品を保管する防災拠点施設等のインフラ整備のほか、市内全域で実施する総合防災訓練の実施や防災情報アプリ「多賀城防災」、災害用備蓄品管理システムの導入など、ソフト面での防災・減災の取組にも力を入れている。



また、多賀城市では震災の記録をデータベース化した「たがじょう見聞憶（けんぶんおく）」を平成26年から運用しており、震災を風化させることなく記録と体験、教訓を地域の未来のために残し、「減災都市」を目指す取組を実施している。この運用に当たっては、授業で「たがじょう見聞憶」を活用している県立多賀城高校と毎年意見交換を行っており、多賀城市と高校が連携しながら、更なる防災・減災の取組の拡大を図っている。

さらに、震災当時、県職員として住民の避難所への誘導等を行った伊藤さんから、震災が発生した当時の状況や避難所の様子をお話しいただき、当時の緊迫した様子を感ずることができた。

参加者のコメント

- ・ 災害発生時の混乱状況を感じることができ、多くの職員が家族を持ちながら避難住民の安全を第一優先にして活動されていたことに改めて尊敬の念を抱いた。また、新たな災害の形として都市型津波について学び、災害発生後の行動にあらゆる想定をしなければ減災につながらないことを実感した。
- ・ 東日本大震災での被災状況や復興の歩み、防災・減災の取組について詳しく伺うことができた。本校では県と市の両方から備蓄品が届いており、多賀城市役所で取り入れている『備蓄品管理システム「B-o r d e r」』は青森県として一考に値するのではないかと思った。
- ・ 震災当時の状況と現在の取組についての説明を受け、災害の怖さや悲惨さを学ぶと同時に自治体としてできる防災を考え実行している姿を見て、防災に対する意識が大きく変わった。
- ・ 復旧・復興に実際に携わった方や、震災当日に対応された方から話を聞くことで、調べる情報からは得られない部分を知ることができた。多賀城市の地理的特徴や都市型津波の特徴の説明を受けた上で被害状況を見ると、改めて被害想定や対策の難しさを感じた。それぞれの土地の特徴を理解することが、防災・減災には不可欠であるということが分かった。また、見聞憶の発信内容を拝見し、記録を残していく上で、体験談や記憶、思いを伝えていくことの大切さを感じた。

(2) 災害との向き合い方

○ 講義 「情報爆発時代における災害との向き合い方」 「災害における当事者意識を高める」

講師 東北大学災害科学国際研究所 佐藤 翔輔 准教授

佐藤翔輔准教授の研究によると、災害時にSNSで流れている有用な情報はごくわずかであることから、災害が起こる前には、自治体から直接確かな情報を受け取れるよう、自治体のSNSアカウントやLINEの登録をしておくこと、災害が起こったあとは、テレビやラジオ等で情報を得ることが災害情報の有効な収集の仕方であるとのことであった。



また、自治体から出される発令は間に合わない・適切でない可能性を考慮した情報判断に関する訓練も必要であること、高齢者避難で高齢者以外の人も避難行動をする気概の必要性が示唆された。

災害当事者となる個人が考える防災・減災行動は、直接命を守る効果のあるリスク回避の行動は少ない状況にあるため、防災・減災行動の効果とイメージのギャップを理解することで命を守る可能性の高い行動となるよう期待したいという話があった。また、災害があったことを学ぶ際には、実際に体験した人から災害事例を聞くことが長期的な記憶に一番効果があることなど、具体的な事例を基に説明していただいた。

参加者のコメント

- ・ データをもとにわかりやすく説明してくださり、自分事として、興味深く話を聞くことができた。防災・減災について知らないことが多く、無知は恐怖心をあおると認識した。普段より防災・減災について関心を持ち、自分の身を守るための行動を起こすことで当事者意識が高まり、災害へのリスクを減らすことにつながると感じた。
- ・ 東日本大震災で臨機応変に対応できた学校では、防災について「絶え間ない対話」をしたことにより対応の選択肢が増えていたとの話が印象的だった。職員同士の対話は防災の視点からも重要であると感じた。
- ・ 災害時には、平常時以上にメディアの特性を正しく捉え、活用する必要があると感じた。また、得られる情報を消化するだけではなく、情報を監視する訓練が必要であることに気付かされた。防災・減災に関する効果とイメージのギャップは、避難訓練が中心となりがちな学校での防災学習にも当てはまり、学校教育がそのイメージを作り出す要因となっているとも感じた。
- ・ 災害時必要な情報を集める時と命を守るために必要な情報を発信する側になった時では利用するローカライズな情報媒体が有効である事、情報を発信する側、避難対応を行う自治体や学校の人材不足にAIの活用も有効である。ラジオなどのローカライズな情報の重要性について生徒にもっと取り上げて考えさせても良いのではないかと感じた。

(3) 地域に根ざした防災人材の育成

○ 講義 「『みやぎ防災ジュニアリーダー』から顔の見える地域防災リーダーへの展開」

講師 東北大学災害科学国際研究所 佐藤 健 教授

宮城県教育委員会では、地域防災活動の担い手である高校生「みやぎ防災ジュニアリーダー」の育成に取り組んでおり、高校生と地域が協働した防災活動を継続していくことで、次世代の人々が住み続けられる地域となることが期待されている。また、顔の見える地域防災活動の中心的な役割を担う人材であり、地域防災を次世代へとつなぐことを使命として町内会や学校での防災活動を行う「仙台市地域防災リーダー(SBL)」の事例を紹介していただいた。

さらに、コミュニティ・スクールの仕組みを活用した取組として、横浜市立北綱島小学校の事例が紹介された。同校では、専門家から指導を受けた地域住民が体験活動の運営や防災訓練を主導するほか、中・高校生が小学生に対して講義等を行うなど、持続可能な地域防災の可能性を見出せる好事例となっている。

今後の地域防災力の向上には、学校と家庭・地域との連携・協働を「しなくてはならない」という義務感ではなく、連携・協働を「したくなる」、「すると楽しい」という内発的な取組となる学校と家庭・地域との関係性構築が期待されるとのお言葉をいただいた。



参加者のコメント

- ・ 地域防災の成功事例を紹介していただき、大変素晴らしい活動をされている地域があるものと驚きました。宮城県という土地柄から、地域の住民に危機意識も備わっていることも成功につながったのではないかと思います。
- ・ 地域、学校ともに防災について中心となる人材を常に一定数つくり、継続的に関わる事が出来るように訓練や活動を計画し、実施する重要性を学んだ。「顔が見える関係性」が自然と真の防災リーダーの育成につながっていく。本校もそういった活動の計画を地域と連携して考えていく必要があると感じた。また、仙台の片平地区まちづくり会の事例を中心として高齢者や幼児など幅広い年代の方々が防災について考えられるような具体的アイデアを学ぶことができ、大変参考になった。
- ・ 地域の防災人材の育成は地道な取組があってこそであり、災害発生時だけでなく、平常時から地域の特性を考慮した活動を行っていることを知ることができた。また、「夏まつりができているから防災訓練もできている」という言葉に、地域で顔の見える関係がいかに大切であるかを再認識した。
- ・ 防災意識の高い、若い世代のリーダーを育てなければならないのだと感じた。また、地域に協力すること、協力してもらうことが必要であることから、より関係性を強めていかなければならない。学校は地域防災の要となることから、生徒・教員ともに意識を変える必要がある。
- ・ 次世代のことまで考えて防災の取組をしているところが印象的だった。様々な角度から種を撒き続けることが重要であることを実感した。

(4) 高校生の主体的な防災教育

① 宮城県松島高等学校における防災教育

松島高等学校は、東日本大震災、令和元年東日本台風で道路冠水、住宅浸水、土砂崩れ、道路陥没などの災害が発生している地域に位置しており、普通科のほか観光科がある学校である。観光科では、ガイド実習や夏季休業中のホテル実習などを実施している。

松島高等学校では、大学等専門機関の助言を基に地域ぐるみの新たな学校防災体制等の構築を目指した、地域連携型学校防災体制等構築推進事業を行っている。この事業では、町役場、地域住民、松島高校の3者合同の防災訓練や、朝読書の時間を防災の学習の時間に充て、地域の人材を活用した講話を実施するなど様々な取組を行っている。観光科では、3年生がガイド役、2年生が観光客役として観光ガイド中の避難について訓練するなど、特色ある取組を行っている。このような様々な取組を通して、教職員、生徒、地域住民との間で災害が起きたときに協力できる関係（＝「顔の見える関係」）を築くことができている。

参加者のコメント

- ・ 地域との合同防災訓練の実施や「松防タイム」として経験の薄い高校生に災害の怖さと防災の重要性を伝えていることが参考になった。
- ・ 松島町・高城区・松島高校の合同防災訓練での課題として、地域住民が指定避難所となっている体育館に入る機会がないことをあげていたが、水害の避難所として指定を受けている本校においても全く同じ状況である。教職員のいない時に地域住民が施設に入り、備蓄品の所在を確認できるよう情報共有する場を持った方がよいと感じた。また、生徒もそれぞれの地域の避難所や、そこにある備蓄品を確認する機会を持つ必要があると感じた。
- ・ 防災について様々な取組を行っており、特に地域を巻き込んだ「合同防災会議」や「合同防災訓練」を行うことで普段から「顔の見える関係」の構築がなされているように感じた。平常時から地域と交流を深めることで、災害時に避難所として活動する際にも円滑にコミュニケーションが図られることにつながると感じた。

② 宮城県多賀城高等学校における防災教育

ア 災害科学科の取組

東日本大震災後、宮城県は災害教育の推進に重点を入れて取り組みはじめ、宮城県の全ての学校に危機管理や防災教育の推進を行う防災主任を設置した。その後、津波の被災地であること、交通の便が良いこと等総合的に判断し、多賀城高等学校に災害科学科の設置が決まった。災害科学科では、災害を科学的な視点で学ぶこと、被災地での実習を盛り込んだ理系のカリキュラムとすること、SSHの視点を持つこと、そのほか国際教育など8つの視点を持つということが決定した。

災害科学科の授業では、東日本大震災の被災地を中心としたフィールドワークを授業に取り入れ、体験的な学びから災害を自分ごとと捉え、課題を発見し、その課題を

自然科学の視点から探究する学習を軸に教育活動を行っている。人のいのちを守るために、ソフト・ハード面両方から、防災・減災について学習し、これらの学びの中から、特に研究したいものを課題研究として行うグループ研究を行っている。そのほか、津波伝承まち歩きや、地域での防災活動、社会貢献活動にも力を入れており、県外、国外の高校生に対して活動の成果を発信するなど、積極的に交流活動を行っている。

イ 授業見学「くらしと安全A」（災害科学科2年7組）

4校時（11:45～12:35）と5校時（13:20～14:10）の授業を見学させていただいた。科目は学校設定科目「くらしと安全A」で、こちらは一般的な保健の教科書をベースに、多賀城高等学校の教員が「災害」に関連する内容を盛り込んで作成したオリジナルの教科書を用いて授業を行っていた。

本時の学習内容は「健康水準と疾病構造」、「健康の考え方と保持増進」となっており、一般的な保健の教科書で取り扱う内容よりも災害に特化したものになっていた。ワークシートでは、「日常」と「災害時」に分けて学習するようになっており、災害時にはどのように行動すべきか、これまでの学習内容を踏まえて考える内容となっていた。

授業では、予想→知識・理解→個人分析→グループワーク→発表・共有→振り返りの流れで学習活動が組み立てられており、特にグループ学習の時間では活発に意見交換している様子が見られた。生徒たちは、これまでの学習で得た知識を関連付けながら、しっかりと自分の意見をもって学習に取り組み、他者との意見交換で自身の考えを深化させており、まさに「主体的・対話的で深い学び」が体現されている授業であった。



ウ 校外活動 災害科学科生徒による「津波伝承まち歩き」

災害科学科生徒による震災伝承活動の一つとして実施している「津波伝承まち歩き」を体験させていただいた。

生徒たちは、自分たちで作成したオリジナルのマップを基に、津波の爪痕が残る各ポイントを歩いて回りながら津波で町が受けた被害について説明してくれた。時折、iPadで当時の津波の映像を流して参加者にも被害の甚大さを伝えつつ、復興への道のりや防災・減災の取組の重要性を訴えていた。

災害科学科の生徒は、大きな被害を受けた地域だからこそ、その教訓を伝えなくてはならないという強い使命感を持っており、私たちに津波の恐ろしさ、防災の大切さを話してくれた。また、各地の防災・減災の取組につなげてほしいという意識で伝承活動に取り組んでいる姿勢が素晴らしかった。



多賀城津波伝承「まち歩き」MAP

イオン多賀城店～
木の松山
JR多賀城駅コース

2011.3.11 東日本大震災 TSUNAMI
津波浸水深 ここまで ↑
これが多賀城高校が設置した津波伝承標識です。
このコース上には約20年。
多賀城内には約100年設置しています。

① イオン多賀城店
店内には当時のあたりまで
波がきたのがわかる標識があり
ます。またこの屋上駐車場のわき
実際の映像を見ながらこの地を
襲った津波がどのくらい強大な
ものだったか実感していただけます。

② このコースの最初の電柱
この電柱は海から約1.5kmの
距離にあります。ここから③の電柱
まで約20年間に標識を設置して
います。

③ 国道45号
八幡歩道橋
この写真(左)は、ここから
約600m先の「多賀城
駅前歩道橋」(※印)のもの
ですが、震災当日はこの
歩道橋にもたくさんの人
が避難しました。
写真は翌日朝のものですが、当日の夜
は雨が降る中、みんなが1人で寄せ
合って救助を待っていたそうです。
歩道橋の下には今も津波の痕跡
が残っています。



④ 木の松山駐車場
駐車場のフェンスには、津波
の跡が白い線で残っています。
約10年未満があり、津波の
いってこい様子わかります。

⑤ 木の松山
宝暦年(1685)にある「木の松山」は、樹齢
約500年の黒松で、ここには869年、
今から約1200年前の真経津波も
こたがたととされており、百人一首の
和歌にも詠みまわされて
います。東日本大震災
のときも、周辺住民は
この木の松山に避難
しました。

⑥ 海から約2kmの電柱
津波はこのあたりまで来ました。
この電柱付近で約80cmでした。

電柱いろいろ

これは NTTの電柱	これは 東北電力	これは 問題とは?
このように 1本の電柱に2社の 電力線が通っている ところの電柱は 珍しいです。	これは、このように 2本の電柱を立てられた 古い電柱で、このコースに 1年だけあり、今は取り除か れています。	電柱に標識を 貼るには、それぞ れに会社に申請が 必要です。また、果 然と名簿の必要 です。このように 申請の書類の理解 が必要となります。 設置するときは 注意してください。

イオンの見学は許可が必要です
1127-2772 (24時間) 多賀城駅V *52 (LINE) 多賀城駅
*521127-7727 (24時間) 多賀城駅V *52 (LINE) 多賀城駅

Momoka.A.

参加者のコメント

- 生徒の活動の様子から、多賀城高等学校で学ぶことに対する目的意識が明確であることが感じられた。参観させていただいた授業も目標が明確であり、生徒の主体的な活動を中心に進んでいたことが印象的であった。津波伝承まち歩きでは、震災当時の動画と現状をリンクさせての説明がわかりやすく、また、生徒の言葉は素直な感情と表現から、伝えたいという思いが伝わってきた。学科の設置にあたり大変な苦労があったことがうかがえ、大変魅力的な学校であると感じた。
- 生徒が震災を後世に伝えていく活動は素晴らしいと思う。これからの高校生は東日本震災を知らない世代だ。この熱量を後の世代につなげていくのは難しいとも同時に感じた。どんな工夫が必要か考えなければならない大きな課題だと思う。
- 東日本震災を経験していない生徒に、「他人ごと」ではなく「自分ごと」としてどう感じてもらうか。また、感じたものをどうやって伝えていくかを試行錯誤してきたことが伝わってきた。



3 研修を終えて

令和7年度教職員視察研修は、宮城県の先進的な防災教育の実践を直接学ぶ機会として、「被災地の教訓」、「災害との向き合い方」、「地域に根ざした防災人材の育成」、「高校生の主体的な防災教育」の4つのテーマを軸に研修を実施した。

まず、「被災地の教訓」では、過去の災害がもたらした影響やその後の復興過程で培われた知恵などを学ぶことで、災害を「自分ごと」として捉え、教職員一人ひとりの危機意識を高める契機となった。

次に、「災害との向き合い方」では、講師の「平時からの備えと心構えが非常時の行動を大きく左右する」という言葉から、災害を恐れるだけでなく、正しく理解し、適切に判断する力を育むことが防災教育の基盤であることを確認することができた。

また、「地域に根ざした防災人材の育成」に関しては、学校と自治会や消防、地域住民との協働が重要であるといった、地域の特性を踏まえた実践例を学ぶことができ、今後の各校での実践につながるものである。

さらに、「高校生の主体的な防災教育」では、高校生が自ら考え、行動する力を育む取組事例を学んだ。高校生が地域の一員として防災に関わる姿勢は、学校のみならず地域社会にとっても大きな財産となる。

本研修で得られた知見を各校の実践に生かし、青森県全体の防災教育のさらなる充実につなげていくことが期待される。

参加者のコメント

- ・ 今回の研修内容は、生徒を預かるすべての教員が体験しておくべきものであると考える。実際に自ら見て、感じ、考えることが最も望ましいが、難しい場合にはオンライン配信など、何らかの形で情報を共有してほしい。
- ・ 多くのことを感じ、考えた研修だった。多くの学びがあった。この学びを今後どう生かしていくのかという点が今後の課題だ。生徒にどう伝え、生徒にどう学ばせるべきか検討していきたい。ぜひ生徒に震災遺構の視察や防災に関する研究を進めている先生方の講義を聴かせたい。災害の怖さをリアルに実感することが防災に対する意識を変える一番の方法だと思う。
- ・ 次年度も実施するのであれば、震災遺構の視察は欠かせない。大川小学校および門脇小学校から学ぶことは多く、我々教員が何を守るべきかを改めて考える契機となると思う。
- ・ 今回の研修を通じて、災害をいかに自分ごととして捉え、行動に移すか、そして「命」や「生きること」について深く考える契機となった。今回得た多くの学びを、一人でも多くの人へ伝えていきたい。
- ・ いずれのプログラムも多くの学びがあり、大変有意義な研修であった。特に実体験をもとにした講話や、現場を実際に見ることで得られた視点は、その場に居なければ得ることができないものである。
- ・ 防災・減災について様々な視点で学ぶことができ、有意義なものであった。災害に対して、これまでは受け身の姿勢であったが、この研修を機に、自分自身が変わる必要があると感じた。

あおもり高校生防災サミット

1 目的

県立学校の実践校における防災教育の様々な取組等について、実践校の生徒同士が意見交換を行い、防災に関する学びを深めるとともに、教職員や高校生をはじめ、地域防災に関わる方々へ広く発信することにより、本県における防災教育の充実を図る。

2 内容と成果

(1) 講演「災害があったことが“伝わる”ために」

講師 東北大学災害科学国際研究所 佐藤 翔輔 准教授

○どれだけ伝わっていたか

東北地方太平洋側は津波が繰り返しており、その記録や記憶は、津波碑、船越や波伝谷などといった地名、語り部による口頭伝承などによりうかがい知ることができる。東日本大震災において岩手県と宮城県を襲った津波では、過去に大津波が襲ったことを知っている人の割合が低い宮城県の方が、岩手県より死亡率が高いというデータが示され、“伝わる”ことの違いについて問題提起された。過去の津波を知っていることや家族で防災について話し合っていた人が事前に避難行動を取っていたとされている。また、過去の津波で大きな被害を受けなかったことで安全神話が生まれ、大きな犠牲が出た地域がある一方で、過去の津波で大きな被害を受けたことで毎年慰霊祭を実施している地域では犠牲者が出なかったという事例も紹介された。

○どうすれば伝わるか

記憶の持続性の研究者によると、20～30年を超えて伝承することは難しいとされている。新潟県関川村を襲った1967年羽越水害は、死者・行方不明者34名、流出・全壊家屋371棟と大きな被害に見舞われた。新潟県関川村では、水害から20年を契機とし、水害の伝承と大蛇伝説の観光名所づくりを目的とした「まつり」を開催し、年々入込み客数を増やししながら、今もなお継続して行われている。羽越水害の発災日とまつりの大蛇の長さに関連を持たせることで、発災から50年以上経過した今でも4人に3人は発災日を答えることができるという。

○どのように伝えるか

語り部がもたらす影響評価実験では、心理面、生理面において影響に違いは無かった。記憶に関しては、音声のみ、映像で聞くことよりも実際に体験した人から災害事例を聞くことが短期的・長期的な記憶に一番効果があるということが明らかになった。

○伝わればそれでいいのか

東日本大震災では、過去の災害経験により高台へ避難したが、過去の災害を越える大津波が押し寄せ、被害が拡大した地域がある。災害の記憶は、伝わるべきであるが、災害の記憶を固定化させないことの必要性について具体的な事例により紹介された。

講演は、災害の教訓を知識としてではなく、自ら考え行動する力へと変えていくことを目的としていた。その意図を受け止め、今後も主体的に防災を考えていく姿勢が求められる。

参加者のコメント

- 様々な調査を基にされた内容であったため、大変参考となりました。（一般）
- 津波の避難について、どのように住民へ伝えればよいのかを考えておりました。佐藤先生の講演で、1つヒントをいただきました。（一般）
- 一教員としてだけでなく、自分が地元で防災減災について考えることも必要だと思いました。（引率教員）
- 過去の災害について後世に伝える事、楽しく学びながら伝えることの重要さがよくわかりました。（引率教員）
- “伝える”ではなく“伝わる”様に話すというのはとても大切な事だと思いました。（高校生）
- 東日本大震災の津波の時に、宮城県と岩手県の津波で意識（考え方）の違いにより、たくさん人の命が亡くなってしまったことから、これからの災害で人々を救えるように災害への呼びかけを大切にしようと思いました。（高校生）
- 家族で地震や災害について話していても、亡くなった人がいないと被害が少ないと思込んでしまい、その結果亡くなってしまう人がいると聞いて、災害があった時には、想定外に備える必要があると思いました。（高校生）
- 過去の災害伝承は、石碑だけでは未来の災害を防ぐことができない。専門家による講座や地域の祭りなど、私たちが広めることが大切だと感じた。（高校生）
- 意外と身近なところに危険を知らせるような石碑や印があったとしても実際には伝わらずにまた同じような被害に遭うことがあることが分かったので、伝わっていくような形(定期的を開催する式典や祭り)などで伝えていくことによって後世に災害の被害を伝えていくことができると知りました。また、伝えられる限界は20～30年ということを知ったので、できるだけ早く、そういうものを定期化して伝えていくということに努めないといけないということを強く感じました。（高校生）



(2) 防災体験

各実践校において今年度防災学習で活用した防災グッズを持ち寄り、見学者に向けた展示や体験を行った。展示や体験を運営する生徒と見学者との交流が活発に行われ、楽しみながら学ぶ有意義な時間となった。

① 避難所用品展示

シェルターテント



各種簡易トイレ



簡易ベッド



手作り段ボールベッド



② 防災用品

100円ショップ防災グッズ



新聞紙スリッパ作成体験



③ 防災食コーナー

- ・「三日分の備え」の展示
- ・空き缶炊飯試食
- ・ポテトチップスオムレツ試食
- ・みそ玉試食



④ 防災教育教材 紙芝居



YURETA



参加者のコメント

- ・ 高校生たちが、自分たちの言葉でしっかり説明している姿に感心させられた。
(一般)
- ・ 各校のブースで体験させていただきました。各校の生徒及び指導される先生方の努力が感じられ素晴らしかったです。(一般)
- ・ 実践校それぞれの特徴をうかがい知ることができ、また、生徒同士の交流も生まれて良かった。(引率教員)
- ・ 防災体験で紙芝居の役をしながら、防災カルタをやったり味噌玉を飲んだりして防災を楽しみながら学ぶことが出来ました。(高校生)
- ・ ツナ缶で火をつけご飯を炊き、ツナ缶も食べられるというのが効率的だと思ったし、防災カルタはすぐに選択肢を選ぶことで、実際に災害が起きた時にもすぐに行動するきっかけになると思った。(高校生)
- ・ 各校の工夫が溢れていて楽しく災害や防災について学ぶことができました！色々な場所で体験できる機会があったら体験していきたいと思ったし、自分が運営する立場にまわっても行きたいと感じました。(高校生)

(3) 活動報告

各実践校代表者による活動報告を行った。



参加者のコメント

- ・ 高校生としてできることを最大限やろうという気持ちが感じられました。いろいろ難しいところもあるかと思いますが、各校での取組がそれぞれ積み重なることで防災についての意識が根付くと思いました。（一般）
- ・ 各校の色があって面白かったです。活動を校内のどの集まりで取り組むか、他校の実践が役に立ちました。（引率教員）
- ・ 自分たちなりに災害の危険さや災害が起こったときにどのようなものがあり、どのようなことが起こるかを他の人達にも共有できたと思います。（高校生）
- ・ 自分たちはまだまだやれることがあることを知った。（高校生）
- ・ 各高校での地域との連携、取組、交流が分かった。地域のイベントにも参加するというのをぜひやってみたい。（高校生）
- ・ 工夫やこれまでどのように活動したら効果的にできるかという努力がわかりすごいと思いました。同じ年代の人達が頑張っているという報告を見て自分も頑張りたいと思いました。（高校生）

3 サミットを終えて

高校生が学校や地域の課題を踏まえた防災について学ぶ姿勢は、今後の地域の防災力向上に大きく寄与する。今回得られた学びを忘れず、地域の未来を守る行動へとつなげていくことを強く望むところである。

参加者のコメント

- ・ 今回参加させていただいて、過去の災害は、地域で伝え続けていかなければならないことを知ることができた。サミットに関わった高校生たちが大変素晴らしく、今後地域を支える人材となることを願うばかりです。（一般）
- ・ このサミットだけでも継続して毎年行っていただけたら、県内の防災・減災意識は維持できるのでは、と感じました。本当に今年度いい機会をいただきました。（引率教員）
- ・ 昨年末の地震から改めて地震の怖さを知り、防災への意識が高くなった。新たに知ること、学ぶことがあったのでとても得るものが多いサミットだった。（高校生）
- ・ 今回のサミットを通じて、防災に対する意識が高まったし、今後の災害に備えて出来ることがたくさんあると思ったので地域の避難場所を把握するなどできることから始めたいと思いました。（高校生）
- ・ 私たちは実践校ではありませんでしたが、他の実践校の人たちの発表を聞いて、たくさんの方が参考になりました。今回聞いたことを学校に持ち帰って、探求の時間に実際に自分たちだけでやってみたいと思います。（高校生）
- ・ 東日本大震災から15年が経過しようとしている今、私達ができることは被災した人達からの体験を実際に聞き、直接人へ伝承していくことだと思います。学ぶだけでなく、どのようにして伝わるように伝えるか、考えていきたいです。（高校生）

第2部

実践校における取組

青森県立青森北高等学校

1 防災教育の主題・テーマ

安全な地域社会づくりに貢献できる人財の育成
～地域社会における「自助・共助」の確立をめざして～

2 対象生徒

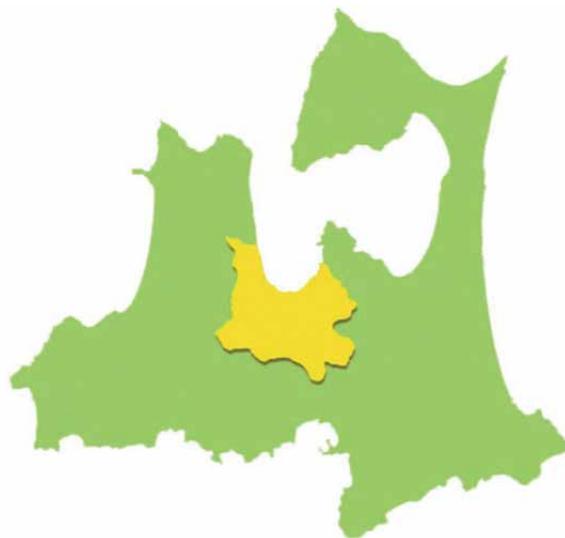
2 学年 1 1 名（総合的な探究の時間 K I T Aプロジェクト「防災・減災」グループ）

3 所在する地域の特徴

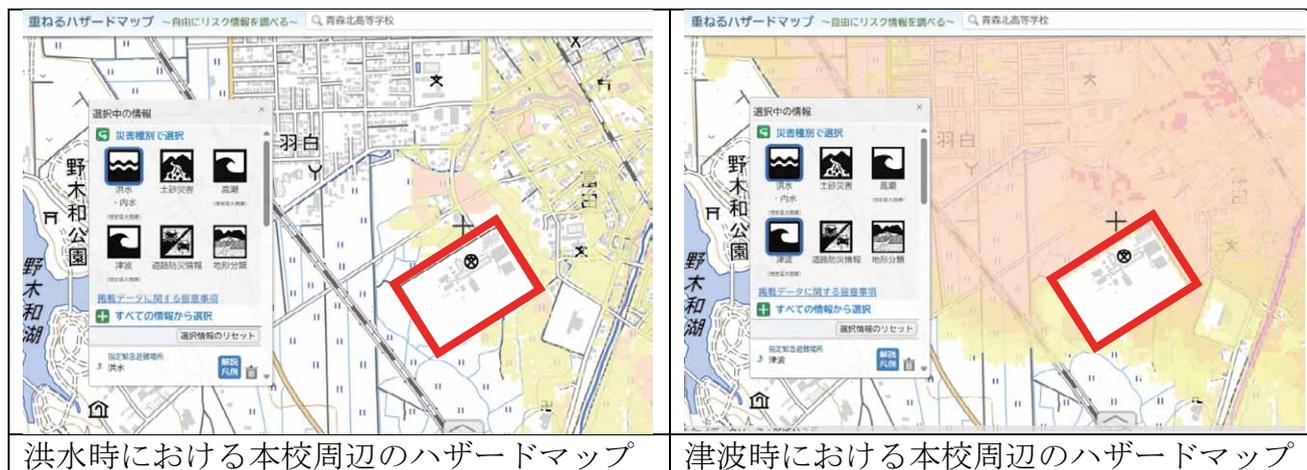
青森市は、青森県の県庁所在地で、青森県のほぼ中央に位置している。面積は 824.61 平方キロメートルで、青森県の中では、むつ市に次ぐ 2 番目の大きさである。人口は県内で一番多い 261,227 人である。（令和 7 年 4 月 1 日現在）

気候は夏が短く、冬が長く、涼しいため、春から秋にかけて快適に過ごすことができる。冬は多くの雪が降るため、人口約 30 万人都市では、世界でも有数の豪雪都市といわれている。

学校の所在地である油川地区は、青森市の西部に位置し、海沿いの平坦な地形が広がっている。この平坦な地形は、大雨が降った際に水が滞留しやすく、浸水被害につながる可能性があるといわれている。



『重ねるハザードマップ』より引用



本校は、周辺の土地より若干高い位置していることもあり、災害発生時における指定緊急避難場所及び指定避難所となっている。災害時は、第一体育館及び第二体育館に約870人を収容することとなっている。

青森市油川地区においては、過去に昭和44年8月の台風第9号や、昭和44年9月の台風第18号などにより、大きな水害が発生している。これらの水害では、床上・床下浸水や道路冠水が生じ、多くの住宅や農地に被害をもたらした。

近年、全国各地で大規模地震や集中豪雨などの自然災害が頻発しており、青森市においても、平時からの災害への備えとして、さまざまな自然災害に対応したハザードマップを作成し、市民に対して浸水リスクの周知を図るなど、防災対策の強化に取り組んでいる。

【青森市ホームページ：各種ハザードマップ】

https://www.city.aomori.aomori.jp/anzen_kinkyu/bousai_shoubou/1002527/1002537/index.html

4 防災上の課題

(1) 防災教育について

青森市における防災教育の主な課題は、過去の災害の記憶の風化とそれらを今後どのように伝承していくかにある。また、これまでに経験のない大規模な自然災害が発生する可能性に備え、知識や技能の習得に加え、地域との連携や協力の精神を養うことが重要である。県や市町村による公助には限界があることから、県民等（県民、自主防災組織、事業所等）による自助・共助の力を向上させる必要がある。

このため県では、県民等の自助・共助の力の向上を図るため、防災を「自分ごと」として捉え、主体的に防災に取り組む意識の醸成を推進している。

(2) 災害発生時の危機管理・避難について

- ① 緊急連絡体制：事前に緊急連絡先を設定し、迅速に連絡を取れるようにする。
- ② 避難ルートの確認：学校内外の避難ルートを確認し、避難経路を明確にする。
- ③ 避難訓練：定期的に避難訓練と避難所としての訓練の実施を行い、生徒・教職員が災害時に適切な行動をとれるようする。
- ④ 備蓄物資：非常食や水、医薬品などの備蓄物資を準備する。
- ⑤ 情報提供：緊急時には迅速に情報を提供し、生徒や保護者に適切な指示を出す。

5 防災教育の取組

(1) 防災教育についての出前授業の受講

日時 令和7年7月9日(水) 13:35～15:25

場所 本校視聴覚室

ねらい

- ・講義やワークショップを通して、災害と防災について理解を深める。
- ・通学している地区の環境の特性を知り、災害を未然に防ぐための対策について考える。

講師 青森中央学院大学経営法学部 准教授 中村 智行 先生

演題 「青森県の災害と防災について」

対象 普通科2年10名、スポーツ科学科2年1名

(KITAプロジェクト「防災・減災」グループ)

内容

- ① 災害とは?
- ② 青森県の災害
- ③ 地震・津波防災
- ④ ハザードマップ
- ⑤ 避難行動

感想等

- ・防災、減災など詳しく学ぶことができた。津波がきたら早く逃げるということが大事とわかりました。
- ・青森市に津波が到達するまで90分くらいかかる(日本海モデル)。
- ・津波から逃げる際、垂直避難よりも水平避難の方が良い。
- ・災害はいつ起こるかわからないのでしっかりと必要な物を準備して備えていこうと思いました。
- ・もしもの災害に備えて家族とも自分とも話し合いをしようと思った。

当日の様子



防災・減災の基礎について、詳しく教えていただいた。

青森市に津波が来るということを聞いて、自分ごととして捉えることができたように思う。

【講義メモ】

- 外力が人間社会に作用することを、何らかの対策により軽減することが「**防災**」
- 人間社会に対策をし、その影響を少し制御することが「**減災**」

(2) 青森第一高等養護学校生徒の本校施設及び備蓄物品の見学

日時 令和7年7月15日(火) 14:35~15:15

場所 本校校舎内

ねらい

- ・総合的な探究の時間(KITAプロジェクト)において、『防災・減災』を研究テーマとしたグループが、災害時に指定避難所となる本校の施設および備蓄物品について理解を深める。
- ・コミュニティ・スクールの取組として、連携している第一高等養護学校の生徒を本校に招き、本校生徒が校内の案内・誘導を行うことでノーマライゼーションへの理解を深めるとともに、避難所での生活を具体的にイメージする機会とする。

対象

- ・青森第一高等養護学校3年生1名
- ・本校普通科2年10名、スポーツ科学科2年1名
(KITAプロジェクト「防災・減災」グループ)

案内場所 本校校舎内(大ホール、放送室、一階多目的トイレ、生徒会館、第1体育館2階、の順に案内)

当日の様子



①段ボールベッドの保管場所の確認



②生徒会館入口への段差をみんなで協力してサポート



③第1体育館2階にある備蓄物品や災害資機材の見学



④学んだことの振り返りと共有

(3) 県防災教育センター見学および体験学習

日時 令和7年8月26日(火) 14:00～15:30

場所 青森県消防学校 防災教育センター
〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内 183-3
電話：017-788-4221 FAX：017-788-4222

ねらい 災害時に自分の身を守るために大事なことを、体験活動(防災講義、AED体験、地震体験、消火体験、煙避難体験など)を通じて理解を深める。

対象 普通科2年11名、3年1名、スポーツ科学科2年1名
(KITAプロジェクト「防災・減災」グループ11名+自主参加2名)

内容 ① 防災講義
② AED(自動体外式除細動器)体験(AEDトレーナーセット)
③ 地震体験(起震機)
④ 消火体験(水消火器)
⑤ 煙避難体験(模擬煙)

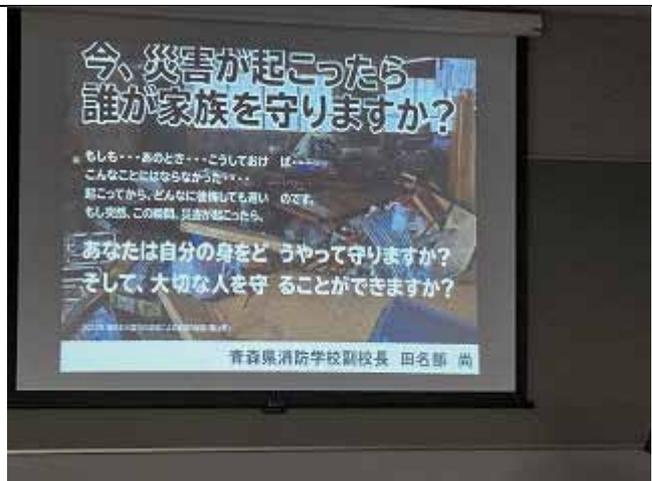
感想等

- ・災害はいつ起こるか分からないことが改めてわかりました。
- ・煙避難は本当に何も見えず、何も感じないので避難するのがとても困難だと思いました。
- ・今後必ず地震などの災害があると思うので、今回教わったことをその場で活かせばいいと思いました。
- ・親と地震について話し合ったり、ローリングストックをしてみたりしようと思いました。
- ・非常用持ち出し袋の用意やハザードマップの確認など日頃からの備えが大だと思った。

当日の様子



① 田名部副校長による、防災についての講義の様子



② まず自分の身を守ることが、他の大切な人を助けることにつながる



③起震機による大規模地震体験



④AEDを使った心肺蘇生体験



⑤水消火器による模擬消火体験



⑥テント型ハウス内の模擬煙による煙避難体験

(4) 避難訓練における「避難所運営訓練」の運営

日時 令和7年9月30日(火) 11:00~12:50

場所 本校第一体育館および各ホームルーム教室

ねらい 本校は指定避難場所および避難所に指定されている。地域住民および近隣の小中学生にも参加してもらい、避難者受入の流れや備蓄物品等の使い方を確認することで、災害時に冷静かつスムーズに行動できるようにすることを目的とする。

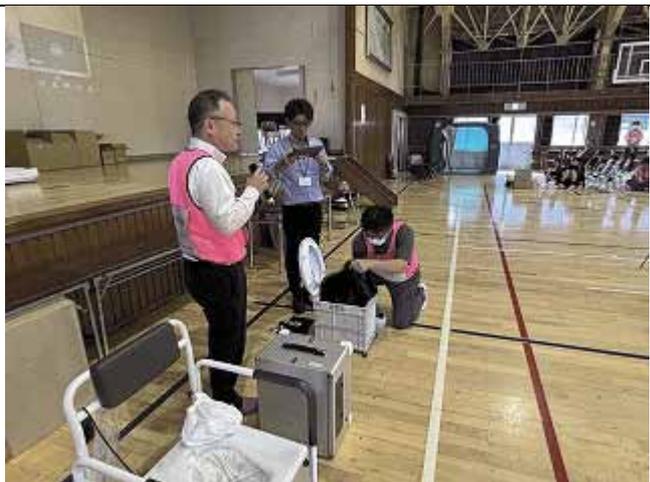
対象 本校全校生徒・教職員、油川小・中の児童・生徒および地域住民

- 内容
- ① 従来の避難訓練(第I部)終了後、油川小、中学校の児童・生徒(約170名)および地域住民が第一体育館に避難してくる。(避難してくる様子をGoogle Meetで中継し、生徒は教室でその様子を見る。)
 - ② 災害発生時における避難場所、避難所について知る。
 - ③ 災害発生に備えて、各家庭で準備しておくべきものについて知る。
 - ④ 避難所に配備されている防災用品を知り、簡易ベッドやパーティション、簡易トイレの使い方について理解を深める。
 - ⑤ 要配慮者用の段ボールベッドを組み立て、実際に触れて強度を実感する。

当日の様子



①青森県危機管理局防災危機管理課による避難場所についての説明



②事業者による簡易トイレについての説明と実演



③参加者（地域住民・小学生・中学生）による、簡易トイレの組立・使用体験



④班員全員でダンボールベッドの組立体験



⑤実際に横になって、段ボールベッドの強度の確認



⑥本校生徒から地域住民へアルファ化米の配付

大規模訓練 防災意識高める

青森市の青森北高校（三浦真校長）は9月30日、同校で、近隣の油川小学校や油川中学校、地域住民らと合同で大規模な避難訓練を行った。参加した計約760人は、災害時の避難経路を確認したほか、指定されており、第1、2体育館には約870人を収容できる。同校は、避難所で使う段ボールベッドの組み立てなどを体験。防災への意識を高めた。

青森北高は、災害時の避難所に指定されており、第1、2体育館には約870人を収容できる。同校は、避難所で使う段ボールベッドの組み立てなどを体験。防災への意識を高めた。



災害用トイレの使い方を学ぶ油川小の児童

青北高、近隣小中や住民と

青森

校は昨年からの、地域住民と合同で避難訓練を行っており、今年も近隣の小中学校にも参加を呼びかけた。

訓練は地震による津波が発生したという想定で行われ、参加者たちは車や徒歩で青森北高の第1体育館に集合。訓練後は15班に分かれ、段ボールベッドを組み立てて寝心地を試したり、災害用トイレの使い方を学んだりした。

中島響輝さん（2年）は「小学生に教えながら、段ボールベッドなどを一緒に組み立てることができた。参加者同士で備えの大切さを教え合うことが大事だと感じた」と話した。

三浦校長は「実際の災害時には周辺の住民らが避難して来るため、地域一体となって訓練を行うことが重要。来年以降も続けていきたい」と語った。（工藤慎子）

令和7年10月10日（金）東奥日報より抜粋

（5）「あおもり防災チャレンジ」への参加

日時 令和7年11月5日（水）10：00～

場所 本校校舎内

ねらい 県で設定している「あおもり防災ウィーク（10月29日～11月12日）」における「シェイクアウト訓練」に全校一斉に取り組むことで、防災意識を高めることを目的とする。

対象 全校生徒・教職員および来校者

内容 地震発生を想定して、校内一斉に1分間程度、揺れの瞬間に自らの身を守る「安全確保行動」をとる。

感想等

- ・放送によるアナウンスに臨場感があった。
- ・普段の避難訓練よりも緊張感を持って机の下に隠れることができた。
- ・教室以外でも、どうやって自分の身を守るか考えることができた。

イベントのバナーと当日の様子



青森県庁ホームページ『あおもり防災チャレンジ』

<https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kikikanri/bousai/bosaichallenge061115.html?ref=tw>



①教室では全員が机の下に隠れ、頭部を保護した



②体育館でも頭上を確認し、低い姿勢を取ることで「安全確保行動」の訓練

(6)「冬季防災訓練」の実施(実施予定)

日時 令和8年2月5日(木) 11:00～12:30

場所 本校第一体育館、調理室

ねらい 本校は指定避難所であるため、避難所で過ごすためのパーティションや簡易ベッドの設置訓練を行い、自衛隊による炊き出しによる食事をとることで、避難所生活を疑似体験する。

対象 本校全校生徒・教職員

内容 ① 自衛隊による炊き出しで提供されたご飯でおにぎりを作る。

② 体育館でパーティションおよび簡易ベッドの設置を行う。

(避難所でのプライベートスペースの確保)

6 成果と課題

【成果】

昨年度に引き続き、本防災事業に参加したことで、生徒と教員がともに学ぶ機会を得ることができた。災害に関する基礎知識や各種災害への備えについて学ぶことにより、防災意識の向上が図られたと実感している。前年と同様の内容であっても、その都度新たな気付きが得られ、防災意識の深化につながった。また、訓練を繰り返す実施することで、非常時においても自然に行動へ移す力の育成が期待される。

今年度の取組を通して得られた成果は、以下の3点である。

①「備えあれば憂いなし」

災害はいつどのような形で発生するかわからない。そのため、正しい知識を身に付け、楽しみながら訓練に取り組むことで、災害に対する備えの重要性を実感することができた。

②「自分の身は自分で守る」

自らの命を守ることができてこそ、他者を助けることが可能となる。つまり、「自助」の確立が「共助」へとつながっていくものだと実感できた。

③「共助の精神の育成」

私たちが今できることを実践し、それを未来へとつなげていくことで、安全な地域社会づくりに貢献できると信じている。

【課題】

災害はいつどのような形で発生するか予測できない。そのため、防災・減災について継続的に学ぶことは、命を守る行動に繋がり、学校現場において極めて重要であると考えられる。

今年度は、昨年度に構築した防災体制や地域とのネットワークを活用しながら、防災教育を継続して実施することができた。一方で、防災に対する意識や理解の定着には、単年度の取組では不十分であるという課題も改めて明らかになった。

今後の課題として、これまでの取組を一過性のものとせず、年間計画の中に位置付け、段階的・系統的に防災教育を発展させていく必要がある。また、生徒が「自分ごと」として災害を捉え、非常時に主体的に行動できる力を育成するため、体験的な学習や繰り返しの訓練を充実させることも求められる。

今後は、地域や関係機関との連携をさらに深め、**学校・家庭・地域が一体となった防災教育を推進することで、生徒の命を守る力の育成と、安全な地域づくりに貢献していきたいと考えている。**

青森県立弘前南高等学校

5 防災教育の取組

(1) 防災関連施設見学①（津軽ダム 中津軽郡西目屋村）

日時 令和7年8月19日（火）

- 内容 ①津軽ダムの概要説明
②ダム内部（監査廊、コンジットゲート等）の見学
③ダム外部（放水口等）の見学



津軽ダムの概要（平成28年竣工）

旧目屋ダムは、昭和35年に完成し、約55年にわたり、岩木川沿川を洪水から守り、下流域のかんがい用水の補給や発電の役割を担い、津軽地方の発展に大きく寄与してきた。ダム完成以来、157回の洪水調節を行い、そのうち計画高水流量を上回る洪水が25回あった。また、利水面での需要の増加が見込まれることから、目屋ダムの再開発事業として、津軽ダムを建設するに至った。これに伴い、砂子瀬・川原平地区の約180戸が水没することとなり、住民は移転を余儀なくされた。

津軽ダムには人々の暮らしを潤し、また人命や財産を守るため、6つの機能（洪水被害の軽減、流水の正常な機能の維持、水道用水、かんがい用水、工業用水、発電）がある。建設にあたっては、例えばクマタカの営巣時期には森林を切り開かないなど、周辺環境保全に細心の注意を払いながら進められた。

感想等

- ・ 見学当日はかなり貯水量が減っていたため、旧目屋ダムの姿を見ることができた。説明を受けた水没地区のことが想像され、今の我々の生活は誰かの犠牲の上に成り立っていることもあると気づいた。
- ・ 大雨によって濁水がダムに流入したときは、濁りの多い層を積極的に放水して下流域の濁りの影響が長期化しないようにしたり、放水時は水温の温度変化を少なくするために取水口の深さを調節したりするなど、説明を聞いて感心する工夫がたくさんあった。
- ・ 令和4年8月の豪雨では、旧目屋ダムでは緊急放流の可能性があったが、津軽ダムによって危険が回避されたことを知り、改めてダムの重要性を知ることができた。
- ・ 蒸し暑い日の見学だったが、内部は階段を下るほど涼しくなり、深い部分の水温が低いことが実感できた。

(2) 防災講演会①

日時 令和7年8月26日(火)
講師 弘前大学教育学部 教授 小岩 直人 氏
演題 「津軽における自然災害リスクと防災」



感想等

- ・ 今まで防災というと、災害が起こってからどうするかに注意が向いていたが、字の通り「災害を防ぐ」ことを考えると、防災サイクルのうち「予防・減災」がとても大切であると分かった。そのためにも、地形についての理解が必要だと感じた。紹介された「重ねるハザードマップ」を使いこなして、色んな土地の危険性を調べてみたい。
- ・ 今自分が住んでいる土地は洪水のリスクが非常に高いことが分かったので、将来家を建てる時は、災害の危険性が低い土地をハザードマップ等で調べようと思う。
- ・ 青森県の地形の特徴について説明を聞き、県内の災害曝露人口について学んだ。弘前市は約70%であったが、近隣の板柳町や鶴田町では100%近い割合になっていることが理解できた。また、弘前市のハザードマップを読み取り、洪水などの災害が起こる可能性が高い箇所や指定避難所の場所について確認した。

(3) 防災講演会②

日時 令和7年9月25日(木)
講師 青森県防災危機管理課 主幹 若山 真紀子 氏
演題 「災害への日頃の備え」



感想等

- ・ 遠地津波のことや、わずか40センチの津波でも足を取られて流されてしまうことを知った。また、災害関連死を防ぐために、法律で良好な避難生活を目指すことと決められていることを知った。講師の若山さんの「防災は想像の延長線上」という言葉が特に印象に残っており、平時をフェーズフリーとして、常に万が一の危機的状況を想像して備えることが大事だと思った。
- ・ まとめられた資料を見ると、災害の多さ、種類、発生場所、規模など本当にたくさんあること、様々な想定もなされていることが分かった。後半に行った「災害時の行動を考えよう」では、何種類もの設定に関して、自分だったらどう行動するかを一生懸命に考えた。また、家族構成や住む場所の違う他のメンバーの考えを聞くと、置かれている状況・環境の違いによって考え方が様々あることに気づいた。普段から多くの想定をすることでいざという時に素早く行動できるようになりたいと思った。
- ・ 今回の講演は自然災害に関する内容だったが、資料には人為災害のことも書かれていた。災害と言えば自然災害をイメージしていたので、人為災害のことについても機会があれば調べてみようと思った。また、防災は自助・共助・公助のつながりで被害を軽減することが重要だと認識できた。

(4) 防災関連施設見学② (弘前市備蓄倉庫 茂森倉庫)

日時	令和7年9月26日(金)
講師	弘前市総務部防災課 小森 正明 氏
内容	①弘前市、茂森倉庫の保管状況 ②弘前市備蓄計画の説明



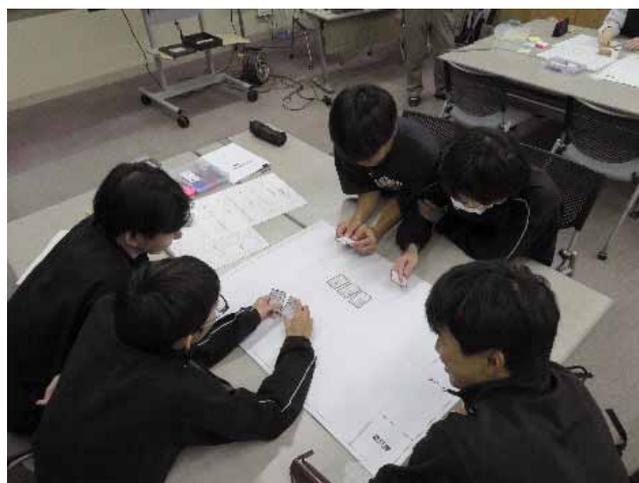
感想等

- ・ 自分が住んでいる身近な所にこんなにたくさんの物品が備蓄されているとは知らなかった。
- ・ 弘前市では地震、水害、土砂災害に対して、支給対象者数は最大で1万9千人を想定しているが備蓄品だけでは十分ではないため、公助だけをあてにせず、自助・共助のために各家庭で携行品をしっかりと備えなければならないと感じた。資料にあった「個人携行品の参考」というリストがとても参考になるので、家族に教えて日頃から災害に備えておきたい。
- ・ 備蓄という言葉のイメージで、置いてあるのは食料品ばかりだと勝手に思っていたが、ベッドや布団、簡易トイレ、おむつ等、ストーブ、パーティションなど、生活全般に関わるものも数多くあって驚いた。また、食料品については消費期限に応じて入れ替えをしているなど、管理が大変そうだと思った。

(5) 防災講演会③

日時 令和7年10月10日(金)
講師 防災士 今田 貴士 氏
演題 「地域住民と連携した避難所運営」

- ①青森県防災士会について
- ②避難所開設・運営の基本事項
- ③避難者滞在スペースの確保
- ④学校校舎の利用方法
- ⑤避難者の受入と誘導

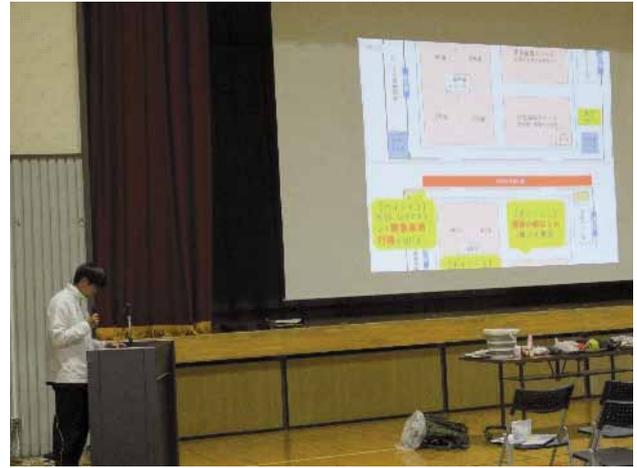


感想等

- ・ 今回の講義では、前半の座学で得たことを後半の実践で生かすということで、やや難しい部分もあったが楽しく活動できた。HUGという、カードを使って避難所について考えるゲームをした。避難所には様々な人が避難してくるため、どこにどういう人を配置するか悩んだ。
- ・ 避難してくる人は「早く避難したい」という気持ちが強く、一人ひとりにゆっくり対応するのが難しいことを学んだ。避難場所に近い人や観光客、中には外国人も避難して来るかも知れず、それぞれ異なる対応をすることが大切だと思った。
- ・ 「みなみ防災デー」に向けた避難所の運営方法について説明を聞いた。避難所の開設から運営まで、やらなければいけないことがたくさんあることを認識した。また、災害が起きる前に、名簿の作成やレイアウトの考案など準備できることをやっておくことが重要だと知った。
- ・ これまでの東日本大震災や能登半島地震の避難所の過酷な実態を聞き、避難所運営の大変さを知るとともに、「想定外をいかに減らすか」が重要だと思った。

(6) 「みなみ防災デー」地域住民と連携した避難所運営

日時 令和7年10月25日(土)
ねらい 将来に備え、行政、地域住民と協力して主体的に避難所を運営するスキルを身につけ、地域防災リーダーとしての心構えを持つ。
内容 ①講演「弘前市防災マップの活用と日頃の備え」
講師 弘前市総務部防災課 小森 正明 氏
②生徒による説明「弘前南高校の避難所運営について」
③非常食の調理、段ボールベッド・簡易トイレの制作
参加者 地域住民と本校生徒合わせて34名



住民からの意見、要望

- ・ いつどこで災害に巻き込まれるか分からないので、自分の居住地以外の避難場所も分かって良かったです。
- ・ 防災意識が普段下がっているので、意識向上にとっても良い企画でした。
- ・ トイレなど実際に見ることができて大変良かったです。またお願いします。
- ・ 高校生と触れ合う機会がなかなかないので、こういった企画は大歓迎です。
- ・ 生徒さんが考えた避難所のイラストを見て、避難する前の想定が大切だと思った。

実施してみた

講演では、これまでに弘前市で起こった災害を振り返り、今後どのような災害が予想されるのか考えた。その後、弘前南高校周辺の防災マップを見ながら、地形上の特性や危険区域、避難所の場所について確認した。次に、弘前市の備蓄計画を見ながら、必要な個人携行品について考えた。小森さんが実際にリュックに入れて持参くださり、イメージがしやすかった。新聞紙でスリッパを作成し、避難所と日常生活との差について考え、避難所での生活をいかに快適に過ごすかについて考えた。

演習では、生徒が考案した避難所のレイアウトについて説明した。顔見知りの人と過ごせるように町内会ごとに区分けすることや、ペット同伴者のスペース、トイレの場所や緊急車両が入ることを想定した内容で、地域住民の方も興味を持って聞いていた。

非常食の調理、段ボールベッド、簡易トイレの制作では地域住民の方と交流し、協力しながら作業を進め、防災で重要な「互いに顔が見える関係性」を作るにはこのような機会を定期的に作る必要があると感じた。アンケートの集計結果では肯定的な意見が多く、地域の防災意識を高めるためにも役だったと思う。



(7) 演習「中学生を対象とした出前講座」

日時 令和7年12月16日(火)

ねらい 今まで受講した講義や演習または地域住民と協働した避難所運営などのスキルをもとに、近隣の中学校でその成果を発表する。

対象 弘前市立第四中学校 1年生

内容 ①発表「災害の種類と災害に対する備え」
②演習 段ボールベッド、簡易トイレの制作



感想等

- これまで受けてきた講義内容を参考にして、災害の種類や備えについて、クイズ形式で中学生と対話しながら進めた。興味を持ってもらえるように質問内容や難しさを工夫して、分かりやすく説明するように心がけた。最初はお互いに緊張していたが、活発な中学生を中心に次第に慣れてきて、楽しそうにやりとりをしていた。
- 段ボールベッドと簡易トイレの制作にはだいぶ慣れてきたので、中学生の反応を見ながら説明する余裕があった。ベッドに横たわったり、凝固剤で固めた水の感触を確かめたりするときの反応が新鮮で、やって良かったと思えた。
- 時間的に余裕があればアルファ化米を食べてもらって反応を確かめたかった。中学生も、自分たちとのやりとりをきっかけに防災について考えてくれるようになると嬉しい。



本番前の最後のシミュレーションのようす

6 成果と課題

【成果】

- ・ 各関係機関と連携して、講演会や施設見学などを実施し、実践的な防災教育に取り組むことができた。
- ・ 行政が取り組んでいる防災活動を知り、生徒のみならず教員も防災意識を高めることができた。
- ・ ハザードマップを活用し、地域で起こり得る災害についてより深く理解することができた。また、これから防災・減災へどう取り組んでいくか考えることができた。
- ・ 避難所レイアウトの作成や、HUGなどのゲームを通して、地域の課題や防災への取組について、生徒が自分事として受け止め、どうするべきかを主体的に考えることができるようになった。
- ・ 災害はいつどこで起こり、巻き込まれるのかは分からないので、自分の居住地以外についても興味を持って調べていた。

【課題】

- ・ 地域防災リーダーの育成という目標を達成するためには、生徒各自がこれまでの活動を一過性のものにするのではなく、今後も継続して活動をしていく必要がある。
- ・ 「みなみ防災デー」のような企画に、より多くの地域住民に参加してもらうために、周知の仕方の工夫、協力、連携をさらに推進する必要がある。
- ・ 自らの命を守るために、自助、公助、共助のつながりの重要性を認識し、主体的に判断し、行動する力の育成が必要である。

下北BOUSAIネットワーク

青森県立田名部高等学校

青森県立大湊高等学校

青森県立大間高等学校

青森県立むつ工業高等学校

青森県立むつ養護学校

1 防災教育の主題・テーマ

「災害に強く、安全な町づくりに貢献する生徒の育成」

- (1) 防災当事者としての意識づくり
～災間を生きる生徒の、防災当事者としての意識をどうつくるのか～
- (2) 災害に強い人づくり・町づくり
- (3) 防災訓練の開発と普及

2 対象生徒

下北BOUSAIネットワーク参加校生徒

- (1) 青森県立大湊高等学校
- (2) 青森県立田名部高等学校
- (3) 青森県立むつ工業高等学校
- (4) 青森県立むつ養護学校
- (5) 青森県立大間高等学校

3 所在する地域の特徴

下北・むつ地域は、中央部に恐山（活火山）があり、多くの住宅地は、むつ市中心部と下北半島沿岸部に集中している。令和3年8月に、むつ市大畑地区および風間浦村において、豪雨災害が発生した。

4 防災上の課題

- ①住宅地が海岸線付近に集中しており、津波を含む浸水被害が懸念される。
- ②東通原子力発電所・大間原子力発電所が存在し、原子力災害が懸念される。
- ③活火山「恐山」があるが、火山対策は十分にされていない。
- ④避難所は指定されているが、避難所運営の準備は十分とは言えない。
- ⑤下北半島と野辺地をつなぐ幹線道路は1本しかなく、幹線道路の遮断で孤立の可能性がある。
- ⑥高齢化が進み、災害時の支援者が不足している。
- ⑦下北全体が海から急峻な地形で、土砂災害の危険性が高い。
- ⑧外国人も増加傾向にあり、出身国も多様で対応が難しい。
- ⑨災害時の支援中心となる若年層への防災教育は十分になされていない。

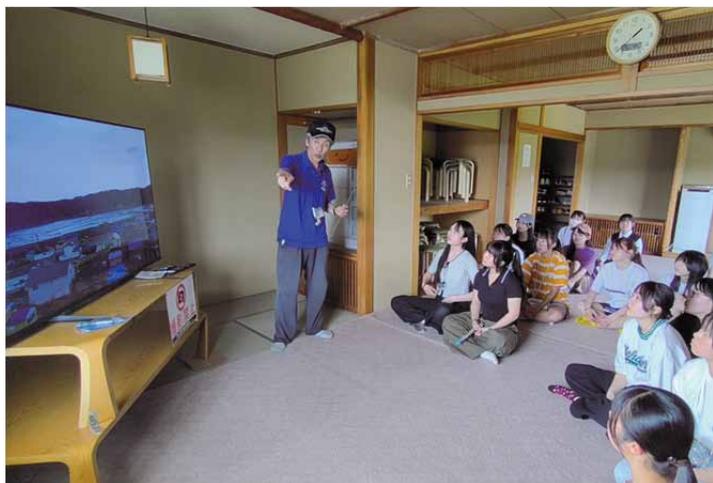
5 防災教育の取組

(1) 震災から学ぶプロジェクト「岩手県宮古市田老町研修」

- 目 的 ・被災地を実際に見学することで、震災と復興について学ぶ。
 ・同地域の生徒同士の学びあいによって、むつ下北地域の防災意識向上につなげる。
- 日 時 令和7年6月7日（土）8時～19時
- 場 所 岩手県宮古市田老町
- 参加人数 合計21名
 大湊高校 13名
 田名部高校 8名

日 程

時 間		詳 細
8 : 0 0	出 発	田名部高校 車内事前研修 ①今回の旅行について ②「釜石の奇跡」等 昼食は車内で各自
1 2 : 0 0	田老町	田老町 震災学習・防災エコツアー（120分） 防潮堤・たろう観光ホテル・避難道体験・ジオサイト三王岩 震災遺構・防災エリアで講話を伺うことになります。 ※ 田老町学ぶ防災 ☎ : 0 1 9 3 7 7 3 3 0 5 バス駐車場：道の駅たろう 岩手県宮古市田老2丁目5-1
1 5 : 0 0	現地出発	車内振り返り ①感想 ②合同報告会について 夕食は車内で各自
1 9 : 0 0	帰 着	田名部高校



被災による特別講話



震災遺構「たろう観光ホテル」

(2) 震災から学ぶプロジェクト「東北電力東通原子力発電所研修」

- 目 的
- ・原子力関連施設と共存する地域で、原子力発電所について学ぶ。
 - ・同地域の生徒同士の学びあいによって、むつ下北地域の防災意識向上につなげる。

日 時 令和7年11月22日（土）8時～12時30分

場 所 東北電力 東通原子力発電所

参加人数 合計20名

大湊高校 15名

田名部高校 5名

日 程

時間	所要	対応		場所	備考
8:40		トントウビレッジ 到着			
8:40～9:00	(20)	発電所概要説明		展望室 1階原子力 コーナー	
9:00		トントウビレッジ 発			
9:05		発電所中央ゲート 着			
9:05～9:20	(15)	手荷物検査・入構手続き		中央ゲート	
9:25		事務本館 着		正面玄関	
		A班	B班		
9:25～10:25	(60)	<ul style="list-style-type: none"> ・屋外安全対策設備見学 (防潮堤他) ・VR動画視聴 ・立入許可証交付 	<ul style="list-style-type: none"> ・立入許可証交付 ・建屋内見学 原子炉建屋ギャラリー タービン建屋ギャラリー 	ゲストホール 原子炉建屋 タービン建屋	
10:25～11:15	(50)	<ul style="list-style-type: none"> ・建屋内見学 原子炉建屋ギャラリー タービン建屋ギャラリー 	<ul style="list-style-type: none"> ・屋外安全対策設備見学 (防潮堤他) ・VR動画視聴 	ゲストホール 原子炉建屋 タービン建屋	
11:15～11:25	(10)	質疑応答 集合写真撮影		ゲストホール	
11:25		事務本館 発		正面玄関	
11:30		中央ゲート 発			
11:35		トントウビレッジ 着			
11:40		トントウビレッジ 出発			

(3) 第一回「まるっと一日防災Day」

目 的 ①防災の大切さを、児童生徒、一般市民、教育関係者と一緒に考える。
②教育関係者（特に小中学校の先生方）に「防災学習」のあり方について考えてもらう。

③下北BOUSA Iネットワークの活動を知ってもらう。

④高校生海外フィールドワークチャレンジの成果を伝える。

日 時 6月28日(土) 9時30分～15時30分

場 所 青森県立大湊高等学校(第一体育館)

対 象 高校生・一般市民(特に学校関係者・中・高校生)

内 容

- ・避難所運営(プラン作成・避難所設営・シェルターテント・簡易ベッド)
- ・防災食体験(自衛隊・防災士会協力)
- ・防災・減災ゲーム
- ・煙幕避難体験(消防署協力)
- ・避難訓練
- ・簡易トイレ体験
- ・地震体験(YURETA)

日 程

	時間・場所	協力	担当
避難所体験 プラン作成 テント ベッド	09:30～11:00 第一体育館	①避難所の机上作成（4名×15）30分 ②避難所について講義 30分 ③テント・ベッド設営 20分 ④簡易トイレについて	8名
地震体験	11:00～11:30 第一体育館	①YURETA（地震発生シート）説明 5分 ②YURETA体験 25分	4名
防災食調理	11:30～13:00 プール横	①湯せん炊飯について 防災士会 20分 ②防災かまどについて SBN 10分 ③調理・食事・後片付け 60分 ※雨天時は調理室 ※おかずはレトルトの非常食 ※容器は使い捨て	8名
休憩	13:00～13:30	①各グループのシェルターテント ②映像「下北BOUSA I ネットワーク」	
防災ゲーム	13:30～14:30 第一体育館	①防災ゲームについて 防災ゲームは3種類準備 ・減災アクション ・防災減災シャッフル ・新しいゲーム ※ゲームは座って行う	4名
避難訓練	14:30～15:00 第一体育館 教室棟校舎	①地震発生 5分 ②土砂発生 5分 ③教室棟3階へ避難 10分 （途中煙幕体験あり：消防署） ※役割カードは受付時に配布	4名
振り返り	15:00～15:30 第一体育館	①グループ毎 10分 ②全体共有 15分 ③個人（formで行う） 説明のみ5分	
後片付け			全員





避難所のレイアウトを作成する参加者



要支援者役の人(手前中央)と一緒に避難訓練をする参加者=いずれもむつ市

高校に避難所開設… 生徒が訓練催し企画

大湊高 40人参加

半島防災考

災害が起きたら、あなたはどの行動しますか……。避難所の設営や地震の揺れの体験などを通して防災意識を高めてもらおうという催しが6月、むつ市の県立大湊高校であった。同校の生徒が企画・運営した初めての取り組み。参加者約40人が実際に災害が起きたときの対応を学んだ。(野田佑介)

「まるっと一日防災Day」と題して行われた催しは、防災士会や地元消防などの協力を得て実施。同校が避難所になったと想定し、レイアウトを考えるところから始まった。

要支援者介助やテント設営

体育館でテントや段ボールベッドの設営を体験した後、手で地震のような揺れを起こせる器具を使って震度5〜7程度の揺れを体感した。体育館から校舎3階の教室までの避難訓練も体験。障がいのある人や日本語での意思疎通が難しい外国人、けがをした人などがいる設定で、肩を貸したり避難ルートを英語で説明したりしながら避難場所まで誘導した。途中には、あえて暗くして足元がわかりづらい、人工的に煙を充満させることで視界が奪われるといった場所を作り、夜間や火災発生時の避難の困難さも体感した。高校生が調理した非常用のアルファ化米やハンバーグ、筑前煮といったレトルトの防災食の試食会に加え、カードゲームで防災に関する知識を学ぶ時間もあった。八戸市から参加した主婦の岩館桂子さんは「体験することで防災を意識するきっかけになる。こうした機会をつくってもらえてありがたい」と話した。

3年 澤谷美雨さん



体験型の防災イベントを企画した県立大湊高校3年の澤谷美雨さん

体験通じて意識広げたい

段ボールベッドなどを使ったことがない。みんなが使い方を知っていれば協力できるのに」。同校で防災教育に取り組む教員の南澤英夫さん(64)に思いを打ち明けると、「いざというときのために知っておくだけでも違う」と開催へ背中を押しもらった。

「見るだけ、聞くだけではなくて、体験することで防災への意識を高めてほしいです」。県立大湊高校3年の澤谷美雨さん(18)は、そんな思いで今回の催しを企画した。

映画から命の尊さ実感

澤谷さん自身、高校に入るまで防災や災害の問題に強い興味を持っていただけではなかった。だが、高校1年の冬に「興味本位で」見た1本の映画が防災への関心を一気に高めた。東日本大震災を経験した宮城県の男性の著書に着想を得て撮られた映画「有り、触れた、未来」だ。

震災が起きた当時はまだ幼かった澤谷さんだが、この映画と男性の話を通して命の尊さを実感し、「命を守る防災のことを本気で学ばなきゃと思った」。

石巻や台湾の被災地も訪問

学校のある下北地域で防災活動に取り組む高校生の団体「下北BOUS AIネットワーク」のメンバーとして、津波で甚大な被害が出た岩手県宮古市や宮城県石巻市の被災地を訪れ、現地の人から震災当時の話を聞いた。昨年末には、大きな地震が襲った台湾にも研修で足を運び、避難所の設備を見学したり運営の考え方などを学んだりした。

カラー充実
紙面ヒューアー



登録無料

(4) 教員研修実施要項（東日本大震災語り部を招いて）

テーマ	災害時における教員の役割と責任 ～旧大川小学校から考える災害における教員の責務～
目的	・災害時における教員の役割と責任について学ぶ。 ・防災、減災への興味関心を高める。
日時	令和7年8月21日（木） 13時30分～15時00分
会場	大湊高等学校2階：コンピューター室
講師	佐藤敏郎氏 小さな命を考える会：代表、大川伝承の会：共同代表

佐藤 敏郎（さとう としろう）

宮城県石巻市出身・在住

1963年生まれ。「大川伝承の会」共同代表。

東日本大震災当時は女川町で中学校教諭として国語を教えていた。

石巻市立大川小学校6年生だった次女が津波で犠牲になった。

震災後には、中学校で防災担当を務めるかたわら、大川小学校で起きたことの検証、伝承、そして想いを多くの人と共有する目的で「小さな意味を考える会」を立ち上げ、全国で講演を行ってきた。

2015年3月に教員を退職し、その後「大川伝承の会」を立ち上げ、ラジオのパーソナリティーも務めるなど、多彩な活動を行っている。



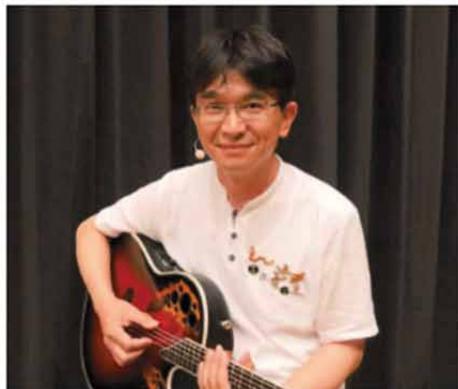
(5) 防災学習（火山災害）

目的	・恐山が活火山であることを踏まえ、火山災害について学ぶ。 ・富士山噴火の備え、火山災害について学ぶ。
日時	令和7年8月26日（火） 6校時
場所	各教室（Zoomによるオンライン）
内容	①火山災害クイズ（15分） ②御嶽山映像（10分） ③富士山噴火について映像（5分） ④振り返り（20分）

(6) 防災学習（地球のステージ）

- 目 的 ・ 東日本大震災の被災者体験を聞くことで防災意識を高める。
・ 自然災害と人的災害（原子力災害・戦争）について考える。
- 講 師 桑山紀彦氏（NPO地球のステージ代表）
- 日 時 令和7年10月21日（火）14時00分～15時15分（75分）
- 場 所 第一体育館
- 内 容 東日本大震災の被災体験と13年目の被災地の現在
そして、世界の紛争（人間が起こす災害について）

公演「地球のステージ」の案内役



桑山紀彦

NPO法人地球のステージ代表理事
心療内科医、精神科医

これまでタイ-カンボジア国境の難民キャンプを皮切りに、湾岸戦争後のイラク、ソマリア、旧ユーゴスラビア、カンボジア、東ティモールなどで医療救援活動を行っている医師。現在も年に数回、東ティモールやパレスチナで医療支援活動を展開している他、地震等の緊急医療救援、被災者の心のケアにも携わっています。2009年11月、宮城県名取市に東北国際クリニックを開設、2011年3月の東日本大震災では自ら被災しながらも、震災翌日から2ヶ月間、24時間体制で診療を行い、その後は被災したみなさんの心に寄り添いながら診療を続ける。2016年4月、神奈川県海老名市に海老名こころのクリニックを開設、児童思春期外来を専門にしながら、日々、多くの子どもたちの診察にあたる。2020年3月、厚生労働省より医療功労賞受賞。



(7) 臨時防災訓練の実施「教室避難」

目的 大規模災害に備え、教室避難の訓練を行う。

内容

1回目 12月12日(金) 8時40分～(朝のSHR)

目的 {
・授業中の災害を想定 本震、余震の2回設定
・手順の確認

注意 {
・教員の安否確認も実施(本人→主任→本部)
・実施について、生徒に事前に連絡せず実施
・終了後 休み時間10分間を確保

8時39分 【本震発災】 緊急地震アラート(事務室から放送)

【校内放送】 教務：第一職員室より放送

「訓練・訓練 地震です。生徒は安全を確保してください。」

(約30秒後) 教室内で安全確認：生徒同士声を掛け合って
安全・安否確認

8時41分 【余震発災】 緊急地震アラート(事務室から放送)

(約30秒後) 教室内で安全確認：生徒同士声を掛け合って
安全・安否確認

【安否確認】 HRで確認 → 本部へ連絡

※ 安否確認の紙を持って本部へ

(担任または副担任 教員負傷の場合は生徒)

※ 傷病者がいた場合はトリアージに従い本部への報告と捜索

8時50分 【校内放送】 以上で防災訓練を終了します。

2回目 12月15日(月) 13時19分～(昼休み～5校時)

目的 {
・休み時間など、生徒の所在がバラバラの状況を想定
・生徒の所在がバラバラのときの手順の確認

【朝のSHR】 昼休み時間に避難訓練を実施するので、昼食は早めに終わるよう連絡。時間は「未定」と伝える。

13時19分 【地震発災】 緊急地震アラート(事務室から放送)

【校内放送】 教務：職員室から放送

「訓練・訓練 地震です。生徒は安全を確保してください」

(約30秒後) ・教室内で安全確認：生徒同士声を掛け合って
安全・安否確認

・安全が確認出来たら生徒は自主的に教室へ移動

・教員はそれぞれの場所へ移動(各HR又は本部)

【安否確認】 HRで確認 → 本部へ連絡

※ 安否確認の紙を持って本部へ

(担任または副担任 教員負傷の場合は生徒)

※ 傷病者がいた場合はトリアージに従い本部への報告と捜索

13時30分 【校内放送】 以上で防災訓練を終了します。

6 成果と課題

様々な校外活動を通じて、生徒は防災に対する理解を深め、災害を「自分ごと」として捉えることができるようになってきている。その成果が令和7年度ぼうさい甲子園での奨励賞（全国3位）受賞につながった。今後も新しい防災学習のあり方についての研究を進めるとともに、5つの学校の連携を強化し、安全な社会づくりに貢献できる人材（生徒）を地元下北へ還元していく。

令和7年度ぼうさい甲子園入賞報告について

下記のとおり、下北 BOUSAI ネットワーク（事務局：大湊高等学校）が、高等学校部門で全国第3位に相当する「奨励賞」を受賞しました。

事務局の大湊高校が内容を取りまとめて応募しましたが、5校の受賞です。

令和7年度 1.17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」の選考結果及び表彰式・発表会の開催について

阪神・淡路大震災の経験を通して学んだ自然の脅威や生命の尊さ、共に生きることの大切さを考える「防災教育」を推進し、未来に向け安全で安心な社会をつくるため、子どもや学生が学校や地域において主体的に取り組む防災活動を募集し、選考委員会による審査の結果、各賞を決定しましたのでお知らせします。

各部門の「ぼうさい大賞」「優秀賞」「奨励賞」に加え、特別賞として「大震災対策賞」、「URレジリエンス賞」、「はばタン賞」、「だいじょうぶ賞」、「フロンティア賞」、「継続こそ力賞」を選考しました。つきましては、表彰式・発表会を開催しますのでお知らせします。

☺

受賞校・団体は以下のとおりです。（応募数：111校・団体）

部門賞

賞／部門	小学生	中学生	高校生	大学生	特別支援学校・団体
グランプリ				関西大学社会安全学部 近藤誠司研究室（大阪府）	
ぼうさい大賞	岩沼市立玉浦小学校（宮城県）	松阪市立鎌田中学校（三重県）	ジュニア防災リーダークラブ（高校生）（愛媛県）		千葉県立香取特別支援学校（千葉県）
優秀賞	釜石市立釜石小学校（岩手県）	宮古市立崎山中学校（岩手県）	宮城県気仙沼高等学校（宮城県）	龍谷大学政策学部 石原凌河研究室（京都府）	宮城県立支援学校 女川高等学園（宮城県）
奨励賞	阿南市立津乃峰小学校（徳島県）	山元町立山元中学校（宮城県）	下北BOUSAIネットワーク（青森県立大湊高等学校）（青森県）	静岡大学教育学部 藤井基貴研究室（静岡県）	京都府立宇治支援学校（京都府）

※グランプリ：各部門のぼうさい大賞の中から1校・団体を選考

下北 BOUSAI ネットワーク

青森県下北郡にある 5 校共同事業です

- ① First Penguin（大湊高校の防災チーム名・最初に海に飛び込む勇気あるペンギン）
紹介映像（約8分）

防災を日本の文化に！
防災を世界の智慧に！

青森県立大湊高等学校
チーム：FIRST PENGUIN
(下北BOUSAIネットワーク)



- ② 高校生の取り組む「防災活動」 朝日新聞 2025年8月20日



- ③ 令和5年 下北 BOUSAI ネットワークの取り組み（約8分）



- ④ 海外フィールドワークチャレンジ プレゼン



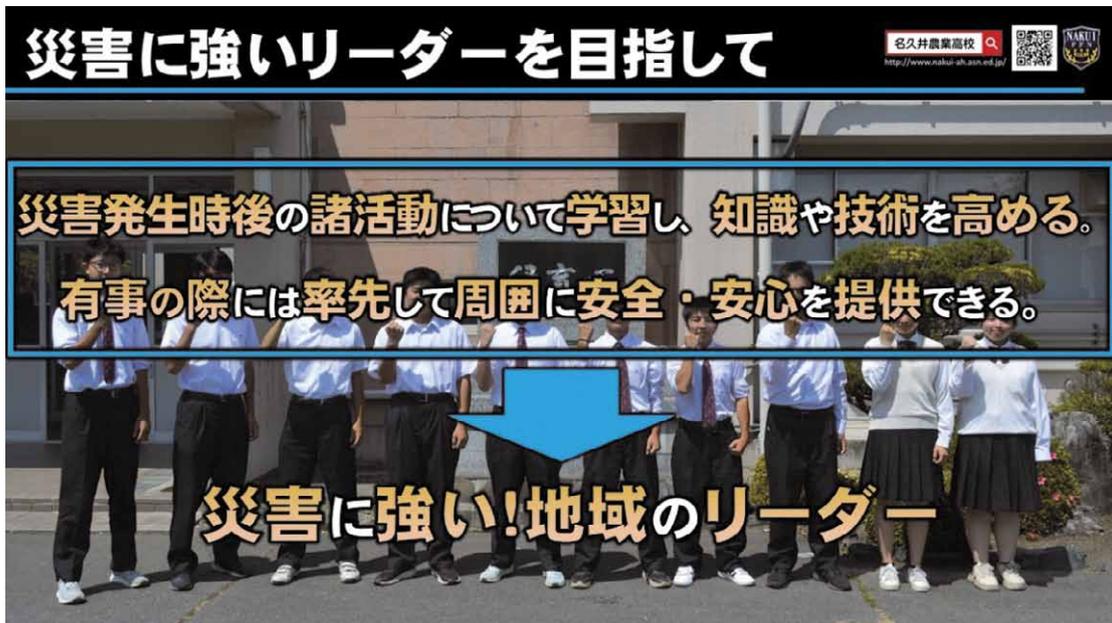
中学生・高校生・大学生の皆さん
一緒に防災に取り組みましょう！

青森県立名久井農業高等学校

1 防災教育の主題・テーマ

「災害に強い名農生～農村における災害時のリーダー育成～」

災害発生後の諸活動について学習し、知識や技術を高める。有事の際には率先して周囲に安全・安心を提供できる逞しいリーダーの育成を目指す。



2 対象生徒

農業クラブ役員、硬式野球部員、1学年全生徒

3 所在する地域の特徴（防災上の課題）

本校の西側約500mに馬淵川が流れており、この地域は度々洪水浸水被害に遭ってきた。昭和40年代までは本校も度々重なる洪水被害に遭ってきたことから、昭和46年に現在の場所に移転した経緯がある。現在の校舎は高台に位置しているため洪水浸水区域外となっている。ただし、本校第1農場（果樹園）や通学路、多くの生徒が暮らす南部町は洪水浸水区域内にあることから、日頃から豪雨災害に対する警戒が必要な地域である。



○馬淵川による近年の洪水災害

馬淵川による近年の洪水災害		
年月	災害の概要	主な被害状況（馬淵川流域）
平成11年（1999年）	低気圧による豪雨	人的被害2名、住家全壊6戸、半壊3戸、床上・床下浸水約320戸、農地被害約330ha
平成14年（2002年）	台風	人的被害1名、住家一部損壊2戸、床上・床下浸水約240戸、農地被害約800ha
平成16年（2004年）	台風	人的被害1名、床上・床下浸水約200戸、農地被害約270ha
平成18年（2006年）	低気圧	床上・床下浸水約200戸、農地被害約130ha
平成23年（2011年）	台風	人的被害1名、床上・床下浸水約300戸、農地被害約560ha
平成25年（2013年）	台風	住家半壊74戸、床上・床下浸水約210戸、農地被害約310ha

参考文献:国土交通省
https://www.mlit.go.jp/river/toukei_chousa/kasen/jiten/nihonkawa/0203mabechi/0203mabechi.02.html

○洪水災害発生時の様子（平成23年）



平成23年9月の台風15号による剣吉観測所での最高水位は7m98cmとなった。その時の総雨量は3日間で平均160mm程度だったが、1週間前から100mm程度の雨が降り、馬淵川の水位が下がりきらないうちに台風15号で雨が降ったことにより、馬淵川の水があふれ、本校第一農場及び野球場が2.97m冠水した。

4 防災教育の取組

(1) 外部講師を活用した防災教室

目的 地域防災の役割を持つ農業高校生として、防災に関する知識や技術を学び、地域防災のリーダーとなる人材を育てる。

日時 令和7年9月1日(月) 15:00～16:30

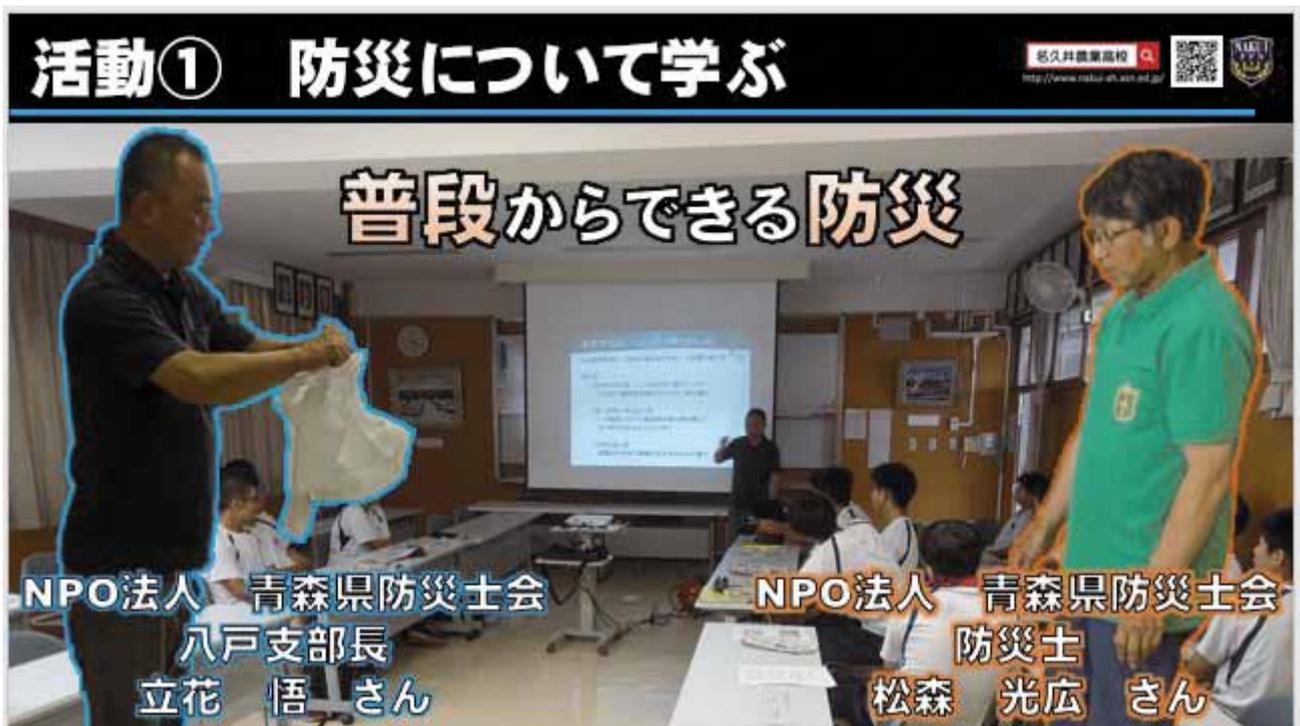
場所 本校会議室

対象 農業クラブ役員、硬式野球部員、有志生徒(20名程度)

講師 青森県防災士会八戸支部 立花悟氏、松森光広氏

スケジュール

- 15:00 講話【会議室】
・普段からできる防災 ・身近な防災について
- 15:15 新聞紙スリッパ製作【会議室】
・災害時に使える新聞紙スリッパを作成
・強度はあまり強くないため、靴を履いたまま履くなどの工夫を
するとよい
- 15:40 毛布担架体験【会議室】
・塩ビ管と毛布を活用した担架を作成
・実際に使用して強度や乗り心地を調査
・塩ビ管を使わず毛布のみ担架も体験
- 16:00 サラダオイルランタンの製作【会議室】
・アルミホイルとティッシュペーパーを活用したランタンの芯
の部分を作成。
- 16:15 レジ袋を使った応急処置【会議室】
・レジ袋を三角巾代わりに活用
- 16:30 後始末・終了



活動① 防災について学ぶ

名久井農業高校
http://www.nakui-ah.ac.jp/



学習内容及び成果

演習「新聞紙スリッパ製作」

(1) 目的

- ① 避難先で中靴がない時の代わりとして使用
- ② 足が寒い時の防寒用具
- ③ 地震が起きた後、割れたガラスや食器などによるけがを防ぐ

(2) 材料

新聞紙

(3) 方法

- ① 手順通り（写真①→④）に新聞紙を折る。
- ② 最後に中敷きとして余った新聞紙を入れる。

(4) 作成順



(5) 補 足

- ・新聞半分でも作れるが、薄いと破れやすくなるため、一枚で作るとよい。
- ・中敷きを入れないと、鋭利なものを踏んだ時にけがをする恐れがある。
- ・新聞紙スリッパは、あくまでも応急的なものであり、普段から履き物を用意しておくことが大切である。

演習「オイルランタン製作」

(1) 目 的

- ① あかりを灯すことで気持ちを安心させるため
- ② ちょっとした暖房代わりとするため

(2) 材 料

背の低い瓶、ティッシュペーパー、アルミホイル、釘、カッター、サラダ油

(3) 方 法

- ① 瓶のふたに穴を開ける
- ② ティッシュペーパーを7cm幅に切り、直径5mmくらいになるように丸める。
- ③ 幅3cmくらいのアルミホイルを中央に2回巻き、灯心の完成。
- ④ 開けた穴に灯心をサラダ油に浸るくらい灯心を入れて火をつける。



(4) 補 足

- ・中に入っているサラダ油がこぼれないように気をつける。
- ・灯心が外にむき出しになっているので、風で火が消えやすい。

演習「身近な物でできる応急手当」

○ビニール袋を活用した三角巾

(1) 目 的

捻挫や骨折をした時に、三角巾代わりとして使用

(2) 材 料

レジ袋 2枚

(3) 方 法

- ① レジ袋の両脇を切る。
- ② 首にかける。

(4) 補 足

添え木等もつけるとさら固定力が増す。



○毛布を活用した担架

(1) 目 的

災害時にけが人を運ぶツールとして使用

(2) 材 料

塩ビ管（鉄パイプ）2本、毛布1枚

(3) 方 法

- ① 毛布を横向きに敷く。
- ② 毛布の上に強度のある棒を人1人分の間を開けて2本並べる。
- ③ はみ出した毛布を棒外から毛布が重なるよう内側にたたむ。

(4) 補 足

- ① 体重制限はないが、簡易担架と同じ重さを目安にする。(100kg程度)
- ② 毛布の毛の摩擦により布が動かないため摩擦が小さい布団や布などでは、滑って落ちる危険があるため使わない。
- ③ 運ぶ際には頭から上げ、下ろす際には足下から下ろす。



(2) 防災学習の成果をアウトプットする取組「南部町防災フェスタへの参加」

目 的 地域にある、農業高校として、「地域防災」について考え、学んだことを南部町の防災フェスタを通し、深め、広めることで地域防災の意識を高める。

日 時 令和7年10月5日(日) 9:50~15:50

場 所 南部町役場

対 象 農業クラブ役員、硬式野球部員、その他有志生徒(約20名)

講 師 日本赤十字東北看護大学 講師 及川真一 氏

スケジュール

- ~ 9:50 ブース準備
- 10:30~14:00 展示・体験コーナー
- 14:00~15:00 避難所設置体験
- 15:00~15:20 後片付け

活動③南部町防災フェスティバル

名久井農業高校
http://www.nakui-ah.asn.ed.jp/



南部町
防災フェスティバル
2025

日 10/5日
10:30~15:00

場 所 町民ひろば(役場前)
いちようホール
B&G海洋センター

防災料理教室
災害救助犬セラピー
避難所設置体験

10:30~12:00 あんこのアンビバ
12:00~13:00 災害救助犬セラピー
13:00~13:15 防災料理教室
14:00~15:00 避難所設置体験

0178-38-5961



○展示・体験ブース

① 新聞紙スリッパ製作体験コーナー

身近な新聞紙でスリッパを作ってもらい、災害時に足を守る術を伝える。



② 毛布担架体験コーナー

毛布担架の作り方を伝え、実際に体験してもらうことで、災害時の有効性を知ってもらう。



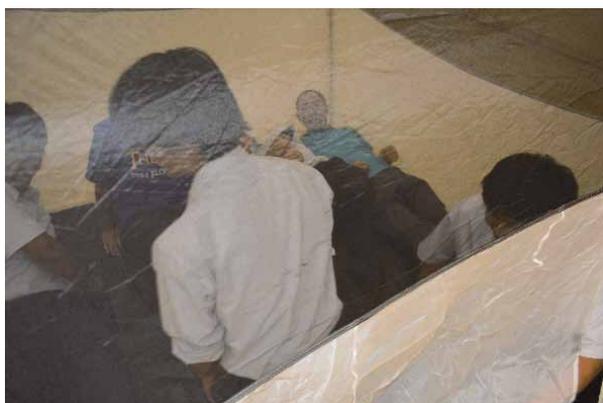
③ 100円均一ショップで揃えられる防災グッズの展示

100円均一ショップで揃えられる防災グッズを展示し、防災グッズが簡単に手に入り、揃えられることを伝える。



④ 避難所設置体験

避難所設置体験では、日本赤十字東北看護大学の及川先生による講話とワークショップを体験し、避難所生活の実態を学んだ。



(3) 実践的な防災調理学習（被災時を想定した調理）

- 目的 被災時に温かい食べ物を用意するための調理方法を理解する。
日時 令和7年10月3日（金）9：00～12：30
場所 本校調理室、食品化学実験室
対象 1学年全生徒（46名）
講師 1学年主任・担任
物品 メスティン（簡易飯盒）、固形燃料、カセットコンロ、ガスボンベ、アイラップ



- ◎ 防災調理体験の活動を発表（アウトプット）する機会として、名農祭の学年展示において、各グループで調理した内容や感想等をまとめたレポートを展示した。

【生徒が作成した実際のレポート例】

令和7年度 1学年展 一人暮らしの料理レシピ展	
作品の題名	真冬の朝のシチュー
選択課題	メスティン
使用する食材 (2人分)	ジャガイモ1個 にんじん0.5個 玉ねぎ0.5個 肉(鶏胸肉)100g シチューの素 水
作り方と時間	<ul style="list-style-type: none"> • 調理時間 <u>90分</u> 1. 具材をお好みのサイズに切る。 2. 注意点 <ul style="list-style-type: none"> • 焦げ付きに注意 飯盒は金属製のため、底面が焦げ付きやすいです。火加減や煮込み時間を工夫しましょう。 • 煮込みすぎに注意 具材が煮崩れしすぎないように、火加減を調整し、煮込みすぎに注意してください。 • 火加減の調整 長時間煮込む必要があるため、焦げ付かないように注意しながら、じっくりと煮込みます。 • 水分量の調整 煮込み中に水分が減ったら、途中で水を足す必要があります。 • 水の量足りず 水を足しやすい大きな飯盒は、煮込み料理に向いています。 • 具材の大きさ 煮込み時間を考慮して、具材は大きめにカットすると、煮崩れしにくいです。 • 飯盒の特性を活かす 飯盒の特性を理解し、お湯を沸かす際などに四角い形状のメスティンと比べて使い勝手が良い点などを考慮しましょう。
工夫した点 こだわった点 事後の感想	<ul style="list-style-type: none"> • まずシチューであるため、焦げ付きや煮崩れなどのシチューを作る上で気をつける事を考えました。またメスティンであるため水を加えたり、火加減を調整することにも気をつけることにこだわります。
完成写真	

6 成果（◎）と課題（◆）

（1）生徒

- ◎ 災害発生時に求められる具体的な対応方法や共助の取組について学習したことによって、災害を自分事として考えることができるようになり、主体的に行動できる資質を身に付けることができた。
- ◎ 身近にある物品を活用した防災グッズ製作や停電等の災害発生時を想定した防災調理を体験したことにより、自ら創意工夫しながら課題を解決しようとする態度を身に付けることができた。
- ◎ 南部町防災フェスタや名農祭での展示ブースなど、学習した内容を地域に還元したり、発表したりする場面（アウトプットの場面）を通じて、自分たちの学習内容の理解を深めるとともに、地域に貢献する態度や地域の役に立っているという自己有用感を得ることができた。
- ◆ 令和6年度は農業クラブ役員を中心とした活動だったが、今年度は硬式野球部や有志生徒の協力を得ながら、昨年よりも多くの生徒の参加を得られた。次年度以降も引き続き、防災に関する取組の輪を校内外に広めていきたい。

（2）教職員

- ◎ 複数の教職員が、それぞれの担当教科や得意分野の特性を活かし、連携して防災教育に取り組むことができた。
- ◎ 8月の県教委主催の視察研修、外部講師の活用などを通じて、先進的な防災教育の取組や専門的な知識等に触れることによって、防災教育に関する研鑽を積むことができた。
- ◆ 次年度以降も持続可能な取組にするため、より多くの教職員を巻き込んで、組織的に防災教育を進めていく体制づくりが課題である。また、PTA活動と連携させ、親子防災教室などの開催を企画したい。

（3）地域

- ◎ 南部町や青森県防災士会八戸支部の協力を得て、体験的な防災教育を実施できたことから、今後も関係機関と防災教育に取り組むための連携体制を継続させたい。
- ◎ 今年度、初めて南部町防災フェスタに展示ブースを出展できたことから、次年度以降も引き続き参加できるよう連携体制を継続させたい。
- ◆ 地元の幼保小中学校と協働した取組について、南部町と連携しながら機会を設けていきたい。特に、本校は農業体験などを近隣の学校等と行っている実績もあることから、そうした既存の取組と防災教育をつなげて実施できるよう関係機関との協力を図ることが課題である。

青森県立青森工業高等学校

1 防災教育の主題・テーマ

学校近くを流れる野内川及び貴船川の洪水浸水、陸奥湾からの津波浸水を想定した防災対策・避難所運営演習を基軸に、将来的に地域防災の担い手となれる人材、地域の防災活動に参加し、安全な社会づくりに貢献できる人材を育成する。

2 対象生徒

生徒会防災委員会 36名（各ホームルーム 2名×6クラス×3学年）

3 所在する地域の特徴

青森県立青森工業高等学校は、青森市の東部「馬屋尻地区」に位置する。本校北西方向には青い森鉄道「野内駅」と青森市営バス東部営業所があり、南東方向には国道4号線が走る。南西部に野内川、北東部に貴船川が流れており、両河川に挟まれた場所に所在する。青森市洪水ハザードマップによると、本校は馬屋尻地区の浸水区域内指定緊急避難場所及び指定一般避難所となっている。

4 防災上の課題

（1）防災教育について

一昨年までの防災教育の主な場面は、火災・地震・水害（垂直避難）を想定した年3回の避難訓練とホームルーム活動のみである。特に避難訓練は、避難ルートの確認と避難後の人員掌握といった形骸化したものになっている。

また、各ホームルームから2名選出され、構成されている生徒会防災委員会があるが、その任務は、避難誘導の際に各ホームルームの先頭と最後尾について避難して、避難完了後に人数を担当に報告するだけという単純なものであった。

（2）災害発生時の危機管理・避難について

毎年、避難確保計画（水害－洪水－）を策定し、青森市へ届け出るとともに、他の災害等を含め、本校の危機管理マニュアルとして作成してはいるものの、近年本校周辺において水害等大きな災害が発生していないということもあり、災害への備えに対する意識の低さが窺える。

また、計画の中で水害（洪水）発生後の立ち退き避難（水平避難）場所として、新青森県総合運動公園や東陽小学校を計画してはいるものの、実際に避難路の確認や水平避難の訓練が行われていないため、生徒を含め、ほとんど知られていないのが実状である。

（3）「高等学校における防災教育推進事業」の実践校として

昨年度からこれらの課題解決に向けた様々な事業を展開しているが、対象となっている生徒会防災委員の防災意識の高揚はみられるものの、全校生徒にまで及んでいないこと、自分ごととして捉えて具体的な行動に移すことが出来ていないこと、保護者や地域住民の皆さんと連携した取り組みができる場面の設定が今後の課題である。

5 防災教育の取組

(1) 演習「防災意識を高める効果的な避難訓練」－第1回避難訓練－

- 日時 令和7年6月27日（金）10：55～12：45
- 場所 本校前庭駐車場
- ねらい 形骸化しているこれまでの避難訓練を見直し、全校生徒・教職員一人一人の防災意識を高めることができる効果的な避難訓練及び防災教育を行うことをねらいとする。
- 協力 青森地区広域事務組合東消防署
- 対象 全校生徒・教職員
- 内容 まずは大地震発生後に実習棟から火災が発生したことを想定した避難訓練を実施し、全校生徒・教職員が前庭駐車場に避難。その後、はしご車、ポンプ車、タンク車、救急車など実際にサイレンを鳴らして前庭に到着。現場には消火、救出活動を指揮する本部が立ち上げられ、はしご車を使って屋上から要救助者（生徒）を救出する実演や、レスキュー隊が建物内に潜入し、要救助者（マネキン）をロープによる斜め救出のデモンストレーションを見学。最後にはしご車からの放水展示とタンク車からの放水体験なども行う。



- 感想 青森地区広域事務組合東消防署の支援・協力により、本校生徒・教職員が前庭（屋外）へ避難するための避難経路の確認と避難後の人員確認・報告手順の確認を行うとともに、災害現場の現実に即した形の訓練を体験することができ、とても有意義な避難訓練となった。

(2) 出前トーク「災害への日頃の備え～避難所開設・運営～」

- 日時 令和7年10月7日（火）13：20～15：20
- 場所 本校視聴覚室
- ねらい 本校が青森市の指定緊急避難場所〔洪水・高潮・地震・津波・内水氾濫・火山現象〕及び指定一般避難所となっていることから、将来的には地域と協働で避難所開設・運営訓練を実施したいと考えており、その基礎知識と現に配備されている防災用品の具体的な取扱い方等について知ることをねらいとする。
- 講師 青森県防災危機管理局防災危機管理課 主幹 若山 真紀子 氏
主事 千葉 凌平 氏
- 対象 生徒会防災委員36名
- 内容 講話を通して避難所開設・運営に関する基礎的な知識を身に付けるとともに、現に配備されている防災用品の組立てや具体的な取扱い方等について演習を通して体験的に学ぶ。



感想 青森県危機管理局防災危機管理課の若山真紀子主幹と千葉凌平主事を講師に迎え、避難所開設・運営に関する基礎的な知識を深めるための御講演いただくとともに、現に配備されている災害用トイレ「ラップポン」の組立てと取り扱い方、今後配備予定のパーティションや簡易ベッドの組立ても実際に体験することができ、適切に意思決定し、行動するために必要な力を身に付けるきっかけを得ることができた充実した研修となった。将来的に地域と協働で避難所開設・運営訓練を行う際に役立てたい。

(3) 講義・演習「わが家の防災タイムラインを作ろう」

日時 令和7年10月28日(火) 13:30~15:20

場所 本校情報技術基礎実習室

ねらい 「防災タイムライン」の作成演習を通して、いざというときに慌てずに行動するための準備、逃げ遅れを防ぎ、風水害から身を守る術を体験的に学習することをねらいとした。

講師 東京法令出版株式会社営業部 東北支社支社長 杉山克洋氏

対象 生徒会防災委員36名

内容 東京法令出版株式会社発行の「わが家の防災タイムライン」キットを活用して、青森県立北斗高等学校周辺に居住している6人家族が風水害に見舞われたことを想定した防災タイムライン作成の演習を行った。当日は、生徒防災委員を学科毎に6人家族を構成して、それぞれ役割を決めて演習に臨む。



感想 台風などの風水害は事前に予測できるので、避難に備えて準備することができることがわかった。演習を通して、自分ごととして捉え、風水害が発生する前に慌てずに行動するための準備と逃げ遅れを防ぎ、風水害から身を守る術を体験的に学ぶ良い機会となった。

(4) 防災講話「防災・減災とは」

日時 令和7年10月29日(水) 14:05~15:00

場所 本校第一体育館

ねらい 防災講話を通じて、防災・減災に関する知識や意識、行動力を育てるとともに、一人ひとりが災害発生時に主体的に地域の支援活動に参加するなど、地域社会の一員として安全な社会づくりに貢献できる「共助・公助」の資質・能力育成をねらいとした。

講師 東北大学災害科学国際研究所 准教授 佐藤 翔輔 氏

対象 全校生徒・教職員

内容 「あおり防災チャレンジ」の一環としての防災講話



感想 「あおり防災チャレンジ」の一環として「あおり防災ウィーク」に合わせて、東北大学災害科学国際研究所准教授の佐藤翔輔氏を講師に迎え、全校生徒を対象に防災講話を行った。地震と震災の違いと防災と減災の違い、リスク回避など講話を聞いて、一人ひとり、防災への知識や意識、行動力が高まるきっかけとなった。

(5) 講演「情報爆発時代における災害との向き合い方」

日時 令和7年10月29日(水) 16:00~17:00

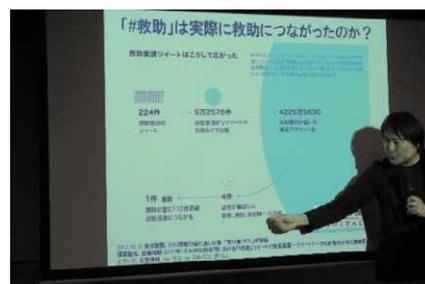
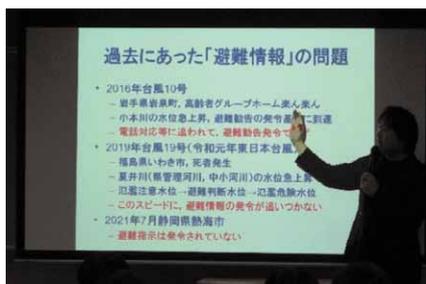
場所 本校視聴覚室

ねらい 講演を通して、防災・減災に関する知識や意識、行動力を育てるとともに、一人ひとりが災害発生時に主体的に地域の支援活動に参加するなど、地域社会の一員として安全な社会づくりに貢献できる「共助・公助」の資質・能力育成をねらいとした。

講師 東北大学災害科学国際研究所 准教授 佐藤 翔輔 氏

対象 生徒会防災委員36名

内容 近年発生した災害の被災地において、情報爆発時代だからこそ発生している「人と災害情報」の間の現象や課題を学術的に再検証し、災害情報に関する具体的な提言を行う佐藤先生の研究の一端について御講演いただく。



感想 台風や豪雨災害が起こりそうなときに情報をうまく使うコツ、ポイントや災害が起きて、被災したあとに、被災生活をうまくのりきるために情報を使うコツ、ポイントなど、今日からでも活用できる具体的な方法を知ることができ、とても有意義な講演であった。

(6) 見学「東日本大震災の震災伝承施設を訪ねて」

日時 令和7年11月15日(土) 8:30~15:45

場所 八戸市みなと体験学習館

ねらい 東日本大震災から得られた実情と教訓を広く次世代に継承し、今後の防災に貢献できる施設「震災伝承施設」として青森県で初めて認定された八戸市みなと体験学習館を直接訪ねることで、災害・防災・減災に関する知見を深めることをねらいとした。

対象 生徒会防災委員36名

内容 八戸市みなと体験学習館「みなっ知」の見学



感想 青森県内初の震災伝承施設「八戸市みなと体験学習館」に直接お邪魔して見学させていただくことで、災害と防災・減災、歴史と文化について体験的に深く知ることができた。

(7) 演習「全校生徒・教職員を避難者と想定した食事提供訓練」

日時 令和7年12月18日(木) 9:00~12:40

場所 本校多目的室

ねらい 全校生徒・教職員あわせて約600人を避難者と想定した食事提供訓練を行い、避難所での調理の進め方や、避難者への食事提供・摂取のシミュレーションを行うことをねらいとした。

協力 防衛省自衛隊青森地方協力本部青森募集案内所
青森市役所総務部危機管理課

対象 生徒会防災委員36名

内容 お湯または水を注ぐだけのアルファ化米約600食を用意して、避難者と見立てた全校生徒・教職員に防災委員が食事を提供する訓練



感想 当日は生徒会行事のスポーツ大会と並行して行いました。青森市よりアルファ化米約600食を御提供いただき、自衛隊青森募集案内所の方々には大量のお湯を沸かしていただきました。防災委員がアルファ化米を開封し、お湯を入れる準備を行い、避難者一人ひとりの健康状態について確認、声かけをしながら食事を提供することができました。さらに、自衛隊青森募集案内所の福島所長さんから手指消毒の実演や実際にあった災害派遣時の様々な経験談も直接伺うことができ、貴重な時間となりました。

(8) 演習「避難所開設・運営訓練」

日時 令和7年12月25日(木) 8:00~13:30

場所 本校第一体育館

ねらい 本校は青森市の指定緊急避難場所及び指定一般避難所となっており、災害が起き避難所となった場合は迅速に避難所開設・運営を行うことが求められている。この演習を通して、防災・減災に関する知識や意識、行動力を育てるとともに、一人ひとりが災害発生時に主体的に地域の支援活動に参加するなど、地域社会の一員として安全な社会づくりに貢献できる「共助・公助」の資質・能力育成をねらいとした。

講師 一般社団法人男女共同参画みらいねっと 代表理事 小山内 世喜子 氏

主催 ATV青森テレビ

協賛 青森県民共済生活協同組合

協力 一般社団法人男女共同参画みらいねっと

青森県危機管理局防災危機管理課

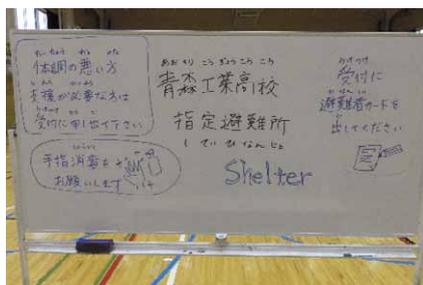
青森市役所総務部危機管理課

NTT docomo

対象 生徒会防災委員36名

内容 「避難所開設・運営訓練」を体験的に学ぶ。

避難者の受入係や要配慮者、避難者等々役割ごとに班分けをし、それぞれの役を担うことで「人権や命の大切さ」「考える力」「判断し行動する力」について学ぶ場とする。また、実際に段ボールベッドやテント、トイレの組立など避難所の設営体験を行い、多様性配慮の必要性の理解へもつなげる。



感想 今回、地域住民を代表して野内町会の皆様と青森市立東中学校の生徒の皆様にも御参加いただき、本校防災委員とともに自治体とも協働で避難所開設・運営訓練を体験する機会をいただいたことに感謝している。今後も継続して、定期的に今回のような訓練を行うことで、いざというときに機能するようアップデートしていくことが大切だと感じた。

(9) 演習「防災意識を高める効果的な避難訓練Ⅱ」－第3回避難訓練－

日時 令和8年1月13日(火) 14:30～15:15

場所 本校第一体育館

ねらい 形骸化しているこれまでの避難訓練を見直し、全校生徒・教職員一人ひとりの防災意識を高めることができる効果的な避難訓練及び防災教育を行うことをねらいとする。

協力 防衛省自衛隊青森地方協力本部青森募集案内所

対象 全校生徒・教職員

内容 大雪の中、陸奥湾を震源とする巨大地震が発生したことを想定し、まずは第一体育館へ全校生徒・教職員が避難し、避難完了後、自衛隊青森募集事務所の福島所長より、アルコール消毒液による手指消毒の仕方について、実演を交えて御指導いただき、全校生徒が手指消毒の体験を行う。次に新聞紙を使った防災スリッパの製作実習を行う。



感想 「避難訓練+防災教育」の形が生徒一人ひとりの防災意識を高める良いきっかけとなっているようだ。今回の取り組みは、これまでの形骸化した避難訓練を今後、生徒目線で見直し、防災意識を高める効果的な避難訓練を生徒がプロデュースし、実践していくための参考となった。

【その他 外部主催の防災教育への参加】

(1) 青森市立東中学校避難所運営訓練

日時 令和7年6月28日(土) 8:30～11:45

場所 青森市立東中学校

参加者 本校防災委員8名、生徒会事務局員2名参加



内容 当日は、段ボールベッドの組立てと組立て補助・段ボール間仕切りの組立て、折り畳み簡易ベッドの組立て、マイ防災ボトルづくりの誘導・助言、防災クイズの補助を行った。

(2) 令和7年度一般社団法人青森県建築士会青森大会【防災ワークショップ】

日時 令和7年7月12日(土) 13:00~15:00
場所 リンクステーションホール青森
参加者 本校防災委員10名、生徒会事務局員3名参加



内容 当日は、段ボールベッド・間仕切りの設営・体験、AEDを使った救急救命の体験、まもルーム(コンテナ型耐震シェルター)やさまざまな避難グッズを見学。非常食も試食した。そして、「避難所に何があったら安心できるか・いいのか」についてグループで話し合い、理想とする避難所設計図をつくる体験ができた。

(3) 県下一斉「シェイクアウト訓練」

日時 令和7年11月5日(水) 10:00~
場所 本校
参加者 全校生徒参加

内容 「あおもり防災チャレンジ」の一環として行われた県下一斉「シェイクアウト訓練」に全校生徒で参加した。授業中、地震発災時を想定し、デスクに潜る、頭を守るなど、身を守る行動を約1分間実施した。

5 成果と課題

- ・ 2年間の活動を通して、生徒だけでなく教職員にも防災・減災について関心を持ってもらう(考える)良いきっかけとなった。
- ・ 避難所の開設及び運営訓練や非常食の食事提供など生徒達が具体的な行動ができる場面を増やし、地域と連携して活動することで、より実践的な動きを確認することができ、自分事として取り組む意識を持つことの大切さをあらためて感じた。
- ・ 工業高校で得た知識、技術を生かした防災への取組についてさらに模索すること、推進事業終了後も継続的に防災・減災について関心を持ってもらうための工夫が必要である。

■ QRコードから、活動について動画視聴できます。



令和6年度の様子



令和7年度の様子

青森県立三沢商業高等学校

1 防災教育の主題・テーマ

「災害時における三沢商業生の役割～ボランティア活動を通じての地域共助～」

災害発生直後や、その後の状況に応じた諸活動の在り方を学習し、地域との関わり方や行動方法を学ぶ。有事の際には周辺地域と学校が協力し、率先してボランティア活動の中心となるリーダー育成を目指す。

2 対象生徒

生徒会執行部及びボランティア委員会からの選抜生徒 10名
(1年生5名・2年生5名)

3 所在する地域の特徴

三沢商業高校が所在する春日台地域は、三沢市内の他の地域と比較して標高が高く台地地形であるため、比較的災害に強い地域と認識されている。海岸からも離れた場所に位置し、本校は三沢市の指定緊急避難場所(想定収容人数13,512人)及び指定避難所(想定収容人数939人)になっている。台地の下方には三沢駅があり、利用生徒は本校を目指し高台を上るように登校してくる。2007年4月に春日台トンネルが開通し、朝夕の時間帯には、本校生徒を送迎する車も含め比較的交通量が多い場所も存在する。

○本校周辺のハザードマップ(洪水浸水・土砂災害)



※出典「重ねるハザードマップ」(国土交通省)

4 防災上の課題

(1) 防災・減災教育について

- ① 起こりうる災害に対して注意喚起はされているが、実践的な訓練や実施回数が不足している。
- ② 減災に向けた取組において、家庭・地域との連携、協力体制の構築が必要
- ③ 教員の防災・減災知識や危機管理意識に差があり、十分な協力が得られない場合がある。
- ④ 今後、継続して指導できる体制づくりが急務

(2) 災害発生時の危機管理・避難について

- ① 災害・有事発生後の生徒の生命の安全確保及び保護者への確実な引き渡し法の確立
- ② 避難所運営に向けての、行政・地域との関係構築の急務
- ③ 学校内での指揮命令系統の確認、役割分担の構築
- ④ 授業活動以外での生徒の安全確保マニュアルの見直し

※ 2025年12月8日23時15分頃に青森県東方沖を震源とする地震が発生した際、本校は避難所として開設されていなかったが、数組の家族を含む15～6名が避難してきた。たまたま、校長が施設点検に来校しており、急遽校内に避難させ数時間でそれぞれ帰宅したが、避難民への対応や関係機関への連絡体制の不備など、学校内での対応に様々な問題が露呈した形となった。

5 防災教育の取組

(1) 外部講師を活用した防災教育

目的 講義やワークショップ等の活動を通じて、自然災害やその他の有事の際に、高校生としてどのように係わることができるのかを学び、今後の活動の足がかりとする。

日程 令和7年7月5日(土) 9:00～12:00

対象 三沢商業防災・減災教育チーム(8名)

講師 八戸学院大学短期大学部介護福祉学科 准教授 鳴海 孝彦 氏

場所 第5選択教室

演題 「災害福祉～高校生の災害時の役割(災害ボランティアへの参加)」

日程 開講式 9:00～9:10

講義1 9:10～10:30

(休憩) 10:30～10:45

講義2 10:40～11:45

質疑応答 11:45～11:55

閉講式 11:55～12:00

災害ボランティアは、被災者・被災地のために

◆ 結局、災害ボランティアのゴールは何か？ そこへ到達するには、誰が誰をどのようにして支援するのかという道筋が大事です。

【聴く】ということ

最後の一言まで聴くこと
語ることよりも聴くこと
することよりもいること
話と話の間に感情を入れない
(感情を入れるということは
話と話の間で自分のセリフを考えているため)

阪神高齢者・障害者支援ネットワーク/黒田裕子氏

講義資料抜粋



講義の様子

- 感想
- ・ 誰しもが災害時には被災者になる可能性がある。その中で、高校生の私たちが災害後の混乱した状況下で何ができるのか考える事ができた。
 - ・ 東日本大震災から様々な自然災害が何度も発生しているが、災害後の避難所の状況や、対応がなかなか改善されておらず課題になっている。災害が起きてからではなく、普段からの準備や地域との関係作りがとても重要だと知る事ができた。
 - ・ 避難所の衛生上の問題のなかで、トイレの状況が特に考えさせられた。お年寄りの中にはトイレの回数を少なくするために水分摂取を控え、それが体調不良の原因につながることに驚かされた。

(2) 校内実践活動 「段ボールベッド製作」「防災食の試食」

日時 令和7年7月22日(水) 9:00~12:00

場所 本校第4選択教室

目的 自分たちで段ボールベッドを製作し、避難所で活用する場合の実用性や寝心地などを検証する。また、市販されている防災食を試食して、避難所生活について考えるきっかけとする。

三角タイプ



四角タイプ



缶詰パンの試食



感想 学校に大量にあるA4の印刷用紙段ボールをためて、2タイプの段ボールベッドを製作した。はさみやカッターを使用する必要が無い、三角形に折り互い違いに組み合わせて並べるタイプ（三角タイプ）と、形はそのままに中に詰め物をする（四角タイプ）双方のタイプを作成し比較した。

	三角タイプ	四角タイプ
製作の容易さ	簡単 カッター・はさみがいらぬ	カットする作業が大変
必要個数	45～56個程度	48個程度
製作時間	短め。20分程度	やや長め。50分～60分
寝心地	安定感あり	安定感あり

総合的に評価し、製作作業の負担が少ない三角タイプの方が実用的で、寝心地にも十分安定感があることが分かった。市販の段ボールベッドは大きいサイズの段ボールを使用するが、学校で毎月大量に出るコピー用紙の段ボール箱を活用して製作することで、資源を有効に活用できることがわかった。

防災チームの中でも防災食を食べたことのある生徒は少なかった。缶詰のパンはアルファ化米よりも人気があり、ココアなどの味が付いているとより食べやすく感じるようだった。

（3）外部講師を活用した防災教育「三沢商業高校防災・減災研修会1」

日時 令和7年7月25日（金）9：00～12：10

目的 三沢商業高校周辺で起こりうる災害について学び、どのような備えが必要か、また、遭遇したときにどのように対処するか考える機会とする。

対象 三沢商業防災・減災教育チーム（8名）

講師 三沢市総務部防災危機管理課 防災危機管理係長 中屋敷 真悟 様
防災危機管理専門委員 矢武 繁雄 様

場所 本校第6選択教室及び古間木川河川敷、三沢市備蓄倉庫

テーマ 「身近に起こり得る災害について知る」

内容 ① 三沢市及び春日台地域での災害想定について学ぶ
② （河川敷へ移動）古間木川が増水した場合の被害想定や伝達システムについて学ぶ
③ 三沢市の備蓄倉庫見学

日程 開講式 9：00～ 9：10

講義 9：10～10：30

（休憩） 10：30～10：45

施設見学 10：40～11：55 （バスにて移動）

質疑応答 11：55～12：05

閉講式 12：05～12：10

※古間木川散策



※三沢市災害物資保管倉庫（三沢市国際交流センター敷地内）



感想 三沢市役所防災危機管理課にいる防災危機管理専門員の矢武さんは、三沢市のYouTubeチャンネルでも市内の防災に関する情報提供に力を注いでいる。その方を講師に、特に春日台地域に起こり得る浸水被害について学んだ。実際に三沢駅のすぐ裏にある河川敷周辺に足を運ぶと、すぐ近くに斜面が迫っており土砂災害警戒区域であることが体感できた。それと同時に川の周辺には思っていたよりも住居が多く、浸水被害の可能性がある場合に避難しなければならない戸数が多いことを知った。

(4) 外部講師を活用した防災教育「三沢商業高校防災・減災研修会2」

目的 三沢商業高校周辺で起こりうる災害について学んだことを、どのように普段の学校生活で意識して活動するか。また、どのように避難所設営に役立てるか考える。

日程 令和7年9月6日（土） 9：00～12：10

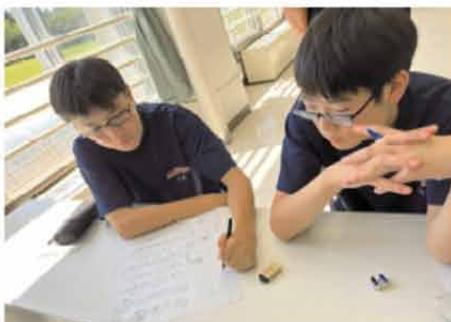
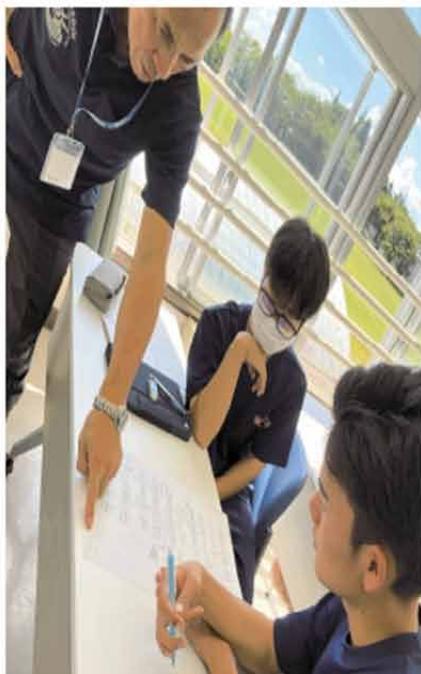
対象 三沢商業防災・減災教育チーム（8名）

講師 三沢市総務部防災危機管理課 防災危機管理係長 中屋敷 真悟 様
防災危機管理専門委員 矢武 繁雄 様

場所 総合講義室

演題 「災害にどのようにそなえるか」

日 程	開講式	9 : 0 0 ~ 9 : 1 0
	講義 1	9 : 1 0 ~ 1 0 : 1 5
	(休憩)	1 0 : 1 5 ~ 1 0 : 3 0
	講義 2	1 0 : 3 0 ~ 1 1 : 5 5
	質疑応答	1 1 : 5 5 ~ 1 2 : 0 5
	閉講式	1 2 : 0 5 ~ 1 2 : 1 0



- 感想等
- ・ 今回の講義で学んだことは、学校までの被災時の避難経路や周辺のハザードマップを調べる中で災害が発生してからあれこれ考えていては決して間に合わないということ。普段からどのように備えるべきか、学校だけでなく家族とも真剣に話し合い準備して置くことが大事だと思った。
 - ・ 学校を避難所として設営する場合、各避難者のスペースを確保することも大事だが、様々な背景をもった人たちが避難してくるので、誰をどこに避難させるか想定しながら避難場所の設定をするのが難しかった。
 - ・ 災害が発生した時、なるべく被災しないようにするためには、様々な想定を普段から考え、準備できる物は、飲料水・食料だけでなく、簡易トイレや非常電源の確保、安全な避難場所・避難経路まで把握しなければならない。学校だけでなく、個人として今後しっかりと考えていきたい。

(5) 三沢高等学校文化祭 防災ブース展示

- 日時 令和7年10月4、5日（土、日）（三沢商業高等学校文化祭一般公開日）
 場所 三沢商業高等学校
 内容 三沢商業高等学校文化祭 防災ブース展示
- ① 防災関連クイズ
 - ② 防災意識アンケート
 - ③ 防災用品体験会(非常用トイレ、段ボールベッド)
 - ④ 災害時の浸水の高さ展示
 - ⑤ アルミ缶を使用した炊飯実験

防災意識アンケート集計結果について (②)

1 自宅で避難する準備が常に出来ていますか。(例：避難用品の準備、家具の固定)			
はい	21人	いいえ	28人
2 家族や同居人と防災について話し合ったことがありますか。 (例：避難経路、連絡手段)			
はい	22人	いいえ	23人
3 自宅や出勤先の近くにある避難場所を把握していますか。			
はい	42人	いいえ	4人
4 災害時、どういった情報源を使って情報を取得するかを考えたことがある。			
はい	39人	いいえ	6人
5 地域の防災訓練に参加したことがある。			
はい	10人	いいえ	36人

感想等 これまでの防災チームの学びや取組を来場者の方々に体験を通して理解してもらう事を目的として文化祭での防災ブース展示を行った。非常用トイレの吸水量の体験や段ボールベッドの使用体験では多くの来場者の方が体験に参加してくれた。②の防災意識アンケートについては、普段から防災に関して話題にすることや防災訓練へ参加する、避難に備えた準備をしている人が予想していたより少ないことが分かった。また、野外では、空き缶を使用した炊飯の実験も行い、来場者からは予想していたよりもお米がしっかりと炊けているなど感想を頂いた。



(6) 外部講師を活用した防災教育「地域・学校合同研修会」

日時 令和8年1月6日(火) 10:00~12:00

講師 八戸学院大学短期大学部看護福祉学科 准教授 鳴海 孝彦氏

目的 近年の自然災害についての備えや被災した後の生活について福祉的観点を交えて伝播し、有事の際の具体的対応について共有する機会とする。

内容 ① 講義 テーマ「災害支援について考える」

② ワークショップ

- ・災害発生時において、避難所となりうる高校へ期待される事柄の整理
- ・地域住民が期待する安心ができる避難所の機能とは(設備面)
- ・地域住民が期待する三沢商高校生への期待
- ・三沢商業高校が被災した際の住民ができる支援内容

③ 学校周辺地区の方々との校内の避難時使用備蓄品、設備の見学会





感想等 三沢商業高等学校と周辺地区の町内会の方々で年1回、共通の内容について情報意見交換会を行っている。今年度、防災に特化した内容をテーマとし、ワークショップ形式での意見交換を実施した。具体的内容としては7月5日に実施した出前講座の内容を受け、八戸学院大学短期大学部の鳴海先生を講師に迎え、震災時の学校生徒側から出来る支援、住民の方々から出来る支援について講義を拝聴後、話し合いを行った。普段接する機会の少ない地域住民の方々との意見交換は双方に刺激のある時間となった。避難時に支援を必要とする人を、具体的被災者の事例を挙げ支援方法を考えることで、これから自分たちが自助、共助の取組を行っていく手がかりとなった。

(7) 外部講師を活用した防災教育「1学年普通救命講習会」

日時 令和8年1月21・22・28日

対象 1学年 119名

講師 三沢市消防本部救急班職員

目的 AED等の利用方法や、様々な生命の危機につながる事故等の対応方法を学ぶことで、事故発生時や災害時に自ら進んで行動できる資質を養成する。
※3時間の講習修了後、「普通救命講習修了証」が授与される。



6 成果と課題

【成果】

1年間、様々な講師の方から防災・減災に係わる考え方や行動様式を学ぶことで、生徒達の危機管理に対する意識の向上ができた。また、近隣地域の方々と直接意見交換や演習を実施できたことで、地域からどのように期待されているかも知ることができ、来年度以降の活動目標がより明確になった様子である。行政機関とも連携した活動ができたことで、今後も協力しながら防災・減災活動に取り組む足がかりができたことも大きな成果であった。

【課題】

学校内での危機管理マニュアルの大幅な見直しや、来年度新たに校内に設置される防災委員会をどのように運営していくか等があげられる。また、生徒だけでなく、教職員も巻き込みながら、地域や行政機関と連携し、今後も活動に取り組んでいきたい。

高等学校における防災教育推進事業
令和7年度実践記録集

令和8年3月発行
青森県教育庁スポーツ健康課

住所 〒030-8540 青森市長島一丁目1番1号
TEL 017-734-9908
FAX 017-734-8275

